東京大学

東洋文化研究所要覧

第6号

昭和51年

C 3
45
6

東洋文化研究所

贈寄
昭和12年6月27日
発行者

東洋文化研究所要覧

目　　次

Ⅰ　目的と沿革 …… 1
Ⅱ　組　　織 …… 3
Ⅲ　職　　員 …… 4
Ⅳ　設　　備 …… 17
Ⅴ　研究活動 …… 23
　A　部門研究 …… 23
　B　共同研究 …… 38
　C　科学研究費による研究 …… 46
　D　個人研究 …… 52
　E　研究会 …… 89
　F　『東洋文化研究所紀要』 …… 98
　G　『東洋文化』 …… 102
　H　本学への教育参加 …… 105
　I　学術交流 …… 114
　J　調査研究事業 …… 120
Ⅵ　東洋学文献センター …… 122
　附録　研究課題 …… 125

東京大學圖書
<10>6470039931
東京大学東洋文化研究所

I　目的と沿革

本研究所は，日本を含むアジア諸地域の政治・経済・社会・文化について，広はんな資料の蒐集と調査にもとづき，かつ多角的な関連諸科学による組織的総合的研究を目的として，昭和16年11月26日，勅令第1,012号をもって，東京帝国大学に附置・創設され，さらに昭和24年に制定された，法律第150号「国立学校設置法」第4条にもとづき東京大学附置研究所となり，今日に到っている。

当初は，哲学・文学・史学部門，法律・政治部門，経済・商業部門の3部門で発足し，東京帝国大学図書館の研究室を借受けて活動した。昭和24年，新たに3部門が増設され，同時に組織を細分化して，哲学・宗教，文学・言語，歴史，美術史・考古，法律・政治，経済・商業の6部門に再編成し，ついで昭和26年に，人文地理学ならびに文化人類学の部門が増設され，合計8部門となった。しかし，アジア諸地域の基礎的研究の重要度の増大に伴い，従来の諸科学の専門体系による部門編成の枠にとどまり得ない要請に基づき，地域区分による部門整備の計画のもとに，昭和35年南アジア（政治・経済）部門，昭和39年に東北アジア部門，昭和39年に東北アジア部門，昭和43年に西アジア（歴史・文化）部門，昭和48年には，東南アジア（経済・社会）部門が増設され，合計12部門となった。

他方，昭和41年には，東洋学に関する文献・情報の収集と，国内外の研究者に対する各種のドキュメンテーション・サービスを目的として，東洋学文献センターが附属研究施設として設置され，東洋学研究のよりいっそうの発展を期すことになった（Ⅵ参照）。

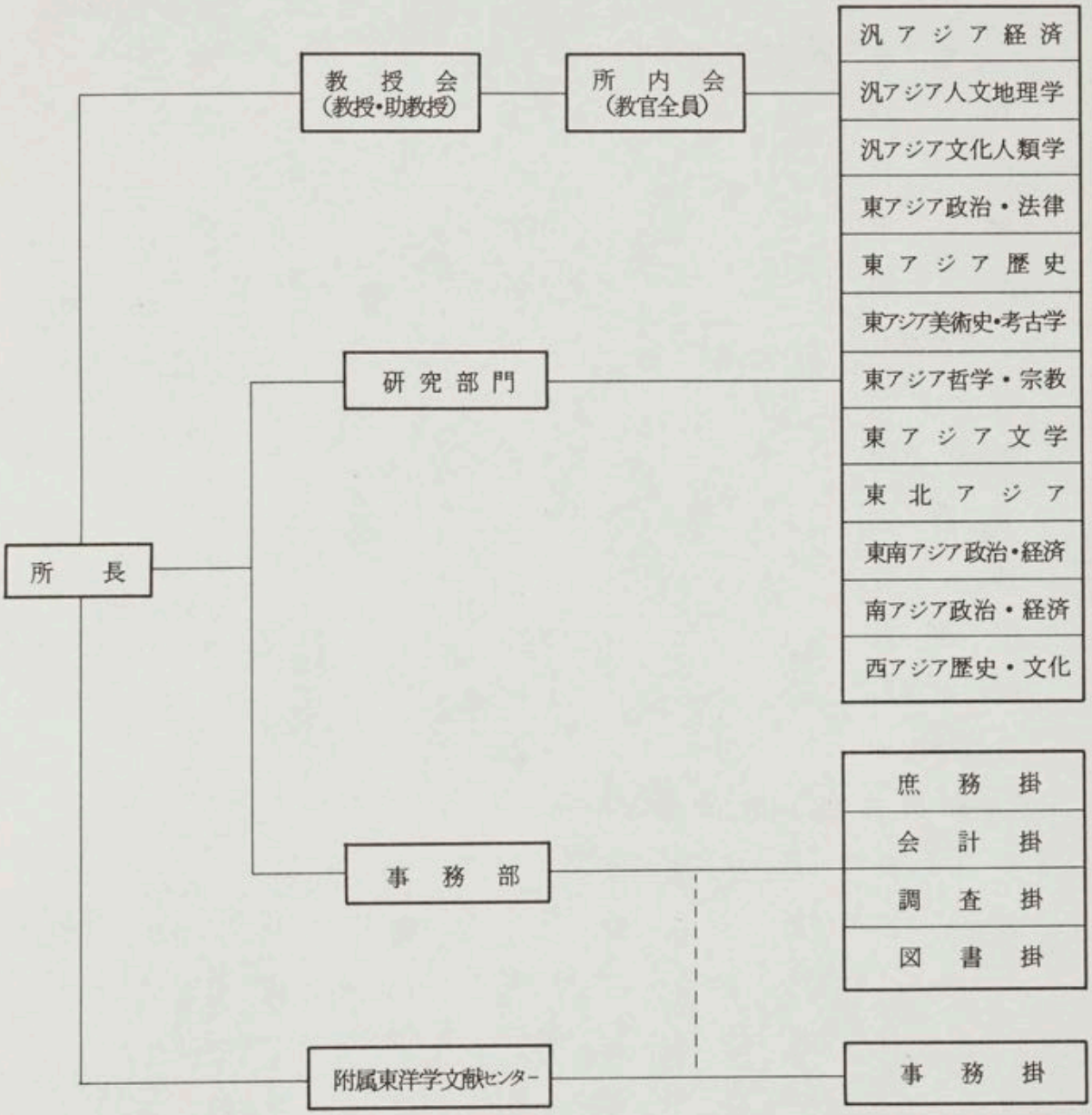
もちろん，この現在の規模では，広はんなアジア諸地域の問題を多面的総合的に究明するには充分ではない。当面研究者は，その専門に応じた独自の課題を各々重点的に選んで研究活動をすすめているが，同時に将来の発展に備えて，各専門分野の分散固定化を防ぐ意味で，合同の研究会を行い，研究者間の共通の問題意識を育てている。また，研究陣容の補強を図るため，毎年の研究計画に従って，

A33336

学内・学外からも専門研究者に研究を委嘱し協力を求める方針をとっている（V参照)。しかし，アジア諸地域全体が世界史的な転換期に入りつつある今日，その研究がますますその重要度を質量ともに増大させていること，また，アジア研究のセンターとして，本学に特設された唯一の機関であることを考え合わせると，この程度の編成組織では，まことに不充分といわねばならない。

日本の学界に蓄積の乏しい限界領域を開拓し，よりいっそうの学際的綜合的研究の実をあげ，同時に研究者を養成していくために，目下，当初の地域全体を対象とした学科別部門編成から，東アジア，東北アジア，東南アジア，南アジア，西アジア等の地域別に部門を再編し，各地域についての専門諸科学による集中的研究を可能にするように研究体制・施設を拡充する方向に向いつつあり，その実現が強く望まれている。

II 組　　織


所　長
教　授　会
(教授・助教授)
所　内　会
(教官全員)
汎アジア経済
汎アジア人文地理学
汎アジア文化人類学
東アジア政治・法律
東アジア歴史
東アジア美術史・考古学
東アジア哲学・宗教
東アジア文学
東北アジア
東南アジア政治・経済
南アジア政治・経済
西アジア歴史・文化
研究部門
事　務　部
庶　務　掛
会　計　掛
調　査　掛
図　書　掛
附属東洋学文献センター
事　務　掛

III 職　　員

職　員　数（昭和51年7月1日現在）

教　　授	13名
助教授	7名
講　　師	3名
助　　手	10名
非常勤講師	9名
研究担当	28名
研究委嘱	48名
事務官	26名
技　　官	3名
用務員	2名
臨時用務員	1名
技術補佐員	1名

職員氏名（昭和51年7月1日現在）

所　　長	大野盛雄	
教　　授	荒　松雄	関　寛治
	鈴木　敬	山崎利男
	佐伯有一	松井　透
	中根千枝	鎌田茂雄
	深井晋司	池田　温
	尾上兼英	山田三郎

助教授	松丸道雄	松谷敏雄
	田仲一成	田中紀彦
	中村廣治郎	蜂屋邦夫
	戸田禎佑	
助手	山之内正彦	小杉修二
	岡本サヱ	嶋田英誠
	原洋之介	白石隆
	佐藤晃	持井康孝
	伊藤亜人	森山茂徳
非常勤講師	青木和夫	茨口善美
	芦田肇	末成道男
	池端雪浦	鈴木斌
	海老根聰郎	福井文雅
	大西昭	
研究担当	秋野正勝	田中正俊
	石田雄	高橋彰
	今西凱夫	竹田晃
	荏開津典生	武田幸男
	衛藤瀋吉	伝田章
	辛島昇	戸川芳郎
	加納康彦	永積昭
	窪添慶文	長崎暢子
	小島晋治	西嶋定生
	坂本義和	坂野正高
	滋賀秀三	平山久雄
	田中慎一	平野健一郎

古島和雄　前野直彬
逸見謙三　丸山昇

研究委嘱

青木保　白鳥令
青山宏　菅沼正久
安宇植　鈴木忠和
伊藤虎丸　杉山二郎
宇都木章　戴国煇
江島恵数　高畠通敏
江波戸昭　館斉一郎
岡野誠　田中敏雄
大岩川和正　谷口興二
小倉芳彦　崔吉城
梶村秀樹　蔡沢洙
加藤祐三　月輪時房
川上涇　友杉孝
姜徳相　長井信一
黒田和彦　中村平次
小島麗逸　西川潤
小林忠　平野邦雄
小山正明　藤井昇三
後藤均平　堀敏一
佐藤保　溝口雄三
佐藤次高　森利一
佐藤信行　柳田節子
塩入良道　泰本融
嶋陸奥彦　劉文献

事務部　事務長　斎藤　益
総務主任　石原守久

庶務掛
掛長　桜井栄一
事務官　館野照政
〃　益子一郎
用務員　溝呂木静雄
〃　竹内竹司
臨時用務員　漆野　雅

会計掛
掛長　花島　栄
事務官　吉沢国太郎
〃　小沢敦美
〃　吉田　正
技官　和田秀雄

図書掛
掛長　植谷忠雄

事務官　江原千代子
〃　中村隆治
〃　中村摩利子
〃　中村敬子
〃　中田　実
〃　工藤一郎
〃　風間　勉
〃　長野　真
〃　新居弥生

調査掛
調査主任　今城治子
事務官　木村源蔵
〃　大熊明子

イラク・イラン調査室
技官　古山　学
〃　千代延恵正
技術補佐員　三宅俊成

1　東洋学文献センター

職員　センター長（教授）　大野盛雄（併任・前出）
センター主任（教授）　鈴木　敬（併任・前出）
助教授　田仲一成（併任・前出）
講師　初見　昇
沢谷昭次

和泉　新

事務官（室主任）中里富三男
畦浦美矢子
神田百合枝
渋谷義治

旧職員氏名

所長	桑田芳蔵	結城令聞
	宇野円空	江上波夫
	戸田貞三	小口偉一
	辻直四郎	川野重任
	仁井田陞	泉靖一
	飯塚浩二	窪徳忠
教授	（兼）北山富久二郎	飯塚浩二
	（兼）荒木光太郎	江上波夫
	宇野円空	米沢嘉圃
	（兼）宮沢俊義	福島正夫
	（兼）山田盛太郎	関野雄
	（兼）辻直四郎	（兼）山本達郎
	石田英一郎	小口偉一
	結城令聞	橋本秀一
	仁井田陞	泉靖一
	植田捷雄	築島謙三
	（兼）丸山真男	川野重任
	（兼）小野忍	窪徳忠
助教授	周藤吉之	（兼）西嶋定生

助教授	松本善海	高橋　彰	
助手	萩野秀一	重田　徳	
	鈴木忠和	大島美津子	
	鈴木中正	加賀谷　寛	
	坂野正高	中村平次	
	後藤基巳	古賀正則	
	飯田須賀斯	関　寛治	
	山口　修	西川正二	
	小倉芳彦	近藤邦康	
	古島和雄	木山英雄	
	衛藤瀋吉	松丸道雄	
	小堀　巌	板垣雄二	
	大木幹一	伊藤知恵子	
	稲葉誠一	甘粕　健	
	花村芳樹	石田米子	
	荒　松雄	月輪時房	
	高橋庸三	梶村秀樹	
	宮川　透	浜島敦俊	
	生松敬三	森　利一	
	佐伯有一	加藤祐三	
	堀　敏一	青木　保	
	高木宏夫	江島恵教	
	大林太良	池端雪浦	
	大野盛雄	黒田和彦	
	佐藤達夫	佐藤次高	
	柳田節子	長崎暢子	

嘱　託	磯田　進	松山　納
	須田昭義	岩本　裕
	大桃要三郎	山本快竜
	土屋喬雄	三根谷　徹
	張　漢裕	吉川逸治
	大場千秋	藤井　宏
	村上正二	梶芳光運
	矢崎源九郎	四宮和夫
	日下部文夫	後藤基巳
研究員	青山定雄	曽村保信
	後藤基巳	香山陽平
	三上次男	大貫良夫
	滝　遼一	月輪時房
	横超慧日	斎藤菊太郎
	永島栄一郎	吉岡義豊
	島田正郎	佐藤達夫
	磯田　進	尾上兼英
	江　実	重田　徳
	祖父江孝男	三枝朝四郎
	半田市太郎	佐伯有一
	高木宏夫	生松敬三
	小堀　巌	石田英一郎
	小野　忍	西野照太郎
	阪口　豊	石母田　正
	桜井清房	糸賀昌昭
	石井　昭	寺田和夫
	甘粕　健	池田次郎

研究員

松谷敏雄
大野盛雄
松井　透
村上重良
嶋田襄平
鈴木　敬
三木　亘
林　武
杉山二郎
衛藤瀋吉
大島太市
黒柳恒男
増田昭三
花村芳樹
新　規矩男
原　寛天
三宅俊成
関　寛治
針生誠吉
福島　裕
近藤邦康
周藤吉之
小島晋治
高橋　彰
海老根聰郎
古賀正則
西川正二

宮川　透
本橋　渥
白鳥芳郎
松丸道雄
神田信夫
村上正二
野沢　豊
小山正明
西島定生
大林太良
田仲一成
石井　昭
野元菊雄
岡崎正孝
荻原宣之
板垣雄三
中村　義
柳田節子
加賀谷　寛
小倉芳彦
木山英雄
常盤絢子
野村浩一
新島淳良
高柳先男
生松敬三
高津斌彰

	藤井昇三	月輪時房
研究員	佐藤保	野田幸三郎
	丸山松幸	芳賀綬
	伝田章	和田久徳
	井上光貞	生田滋
	前野直彬	中村廣治郎
	溝口雄三	外間守善
	曾野寿彦	張寿根
	増田昭三	丸山真男
	竹内実	碧海純一
	岸幸一	
非常勤講師	福島裕	速水佑次郎
	新島淳良	青山宏
	神田信夫	佐藤信行
	丸山昇	菅沼正久
	小倉芳彦	友杉孝
	生松敬三	鈴木斌
	泰本融	伊藤虎丸
	塩入良道	西川潤
	堀敏一	池端雪浦
	滝川勉	黒田和彦
	高田淳	大岩川和正
	高畠通敏	館斉一郎
	井門富二夫	長井信一
	鈴木忠和	平井俊栄
	末成道男	

なお，制度上，研究員の名称は昭和23年4月から昭和37年3月まで使用されたが，昭和37年4月以降，本学内の教官には研究担当，それ以外の者には研究委嘱と呼称されることになった。

研究担当	丸山真男	丸山　昇
	坂野正高	丸山松幸
	碧海純一	前野直彬
	関野　雄	戸川芳郎
	西島定生	今西凱夫
	柳川啓一	竹田　晃
	逸見謙三	高橋　彰
	衛藤瀋吉	荏開津典生
	古島和雄	滋賀秀三
	加納康彦	坂本義和
	伊藤亜人	平山久雄
	伝田　章	飯島武次
	高田　淳	平野健一郎
	武田幸男	石田　雄
	田中正俊	
研究委嘱	井門冨二夫	勝藤　猛
	生松敬三	川上　涇
	生田　滋	神田信夫
	池田次郎	姜　徳相
	浦野起央	古賀正則
	海老根聰郎	塩入良道
	沖野安春	白鳥　令
	梶村秀樹	末成道男

研究委嘱

菅沼正久
杉山二郎
高田　淳
高畠通敏
滝川　勉
館　斉一郎
戸田禎佑
張　寿根
中村廣治郎
中村平次
西川喜久子
西川正二
野田幸三郎
芳賀　綏
萩原宣之
浜田　隆
原　忠彦
藤井昇三
外間守善
堀　敏一
堀内清治
増田精一
丸山　昭
丸山　昇
溝口雄三
宮川　透
森岡清美

泰本　融
和田久徳
大岩川和正
菊地信男
小島麗逸
鈴木忠和
戴　国煇
友杉　孝
安部喜也
江波戸　昭
小山正明
茨口善美
佐藤信行
鈴木　斌
高柳先男
伝田　章
柳田節子
青木和夫
伊藤虎丸
今岡日出紀
加藤祐三
佐藤　保
田中紀彦
土屋健治
西川　潤
平野邦雄
森　利一

研究委嘱	青木　保	福井文雅
	青山　宏	劉　文献
	宇都木　章	安　宇植
	江島恵数	大西　昭
	小倉芳彦	加納啓良
	後藤均平	小林　忠
	田中敏雄	佐藤次高
	谷田興二	速水佑次郎
	月輪時房	平井俊栄
事務官	山高力三	吉成大志
	根本喜蔵	千葉　仁
	岡林郁子	中村　宏
	宮澤素子	長内太郎吉
	高木武雄	野依菊之助
	北村照子	横山　勉
	正本園子	中谷倶子
	入澤良子	田頭　敏
	藤原　巌	丹尾文子
	福田三津子	福本芳子
	西原哲子	岡庭文雄
	戸田勝子	根田信一
	田島ヒロ	池原ヨリ
	山之内るり	井上　望
	永易正敏	塚本章壽
	春山信一	永田千枝子
	角田共子	駒見直行
	古島琴子	籾山とう

事務官

小林　眸
松尾　頼昭
中元　昇
工藤　松之助
川村　浩正
宮腰　澄江
遠藤　譲
苅部　良吉
友坂　恵美
丸山　巍
上代　清
糸川　登美子
萩庭　勇
加藤　静子
宮本　健
千代延　哲男
佐多　正子
比護　ミドリ
赤沢　トキ子
小野　悠紀子
長塚　均
大嶋　真治
大熊　良一
渡辺　茂彦
新井　康次
半沢　哲郎
羽石　咸子
熊沢　時雄
橋本　公治

Ⅳ 設　　備

1 建　　物

本研究所は，当初本郷構内に建物をもつことが予定されていたが，戦争の拡大によって計画実現が不可能となったので，暫時，本学附属図書館内に研究室，書庫，事務室を置いた。昭和23年４月１日，外務省所管の東方文化学院の解消をみるに及んで，同年７月に同学院東京研究所の所在地であった大塚に本拠を移すこととなり，外務省研修所と同居という暫定的な形で，旧学院の建物の一半を借用し，従来利用していた附属図書館研究室の一部を分室とした。このように，研究施設として，まことに遺憾の多い状況のまま20年余を数えるにいたったが，さいわい本郷構内に建物を新築する計画が具体化し，その第一期工事の完成にともない，昭和40年10月に研究室の一部と事務室が移転した。さらに昭和42年３月に第２期工事が完成したので，残りの研究室，書庫，図書，事務室，および東洋学文献センターが移転した。昭和43年度には，総合研究資料館の増設に伴う第３期工事として研究室，事務室や書庫の全部が改築移転した。

しかし，それ以後今日までの８年間に，２部門が新たに増設され，３部門が実験講座化され，厖大な蔵書およびフィールド・ワークその他による特殊収集資料の増大，それに伴う一般閲覧者の増加によって，施設の狭隘化が痛感され，その増設が緊急に望まれている。

2 図書・資料類

○昭和51年４月１日現在の蔵書数

和　書	３７,８２２冊
漢　籍	２１２,４６３冊（東洋学文献センターの蒐書 7,１７０冊を含む）
洋　書	３３,４０１冊
未整理	２２,６００冊

（合　計）３０６,２８６冊

和中朝雑誌　2,３５９種

欧　文雑誌　　６８７種

（合　計）　　3,０４６種

○図書の年間増加数

過去数年の年間増加冊数は約5,000冊であったが，昭和50年度の増加冊数は7,760冊であった。

おもな収蔵図書をあげると，次のとおりである。

〔**大木文庫の受贈**〕本研究所創設の当初，大木幹一氏より中国法制関係書総数3,168部，45,452冊の寄贈を受けた。法律のみならず，政治，外交，経済，産業などの研究上，実用に供し得る意味での貴重書が多く，明代以後の時期の研究にはとくに欠くことのできない蒐集資料である。いわゆる官箴や公牘の類の数百部は，本文庫のひとつの柱梁をなしている。その目録は昭和34年旧蔵者の原本により編纂刊行された。

〔**帝国学士院東亜諸民族調査室蔵書の移管**〕昭和19年帝国学士院東亜諸民族調査室の解散にともない，その蔵書和漢洋・雑誌・資料等2,000冊が移替された。これらのうちには西欧における東亜諸民族研究の主要なものが集められている。

〔**旧東方文化学院図書の移管**〕東方文化学院東京研究所は，昭和4年に東洋文化の総合研究の機関として創設され，外務省の所管に属したが，昭和23年廃せられた。昭和42年3月その旧蔵書の和漢洋あわせて103,587冊が本研究所に移管された。

〔**松本忠雄氏旧蔵書**〕昭和25年度科学研究費交付金により，松本忠雄氏旧蔵の和漢洋書，雑誌など3,000冊を購入した，これはとくに近代中国研究資料として重要なものを多く含んでいる

〔**長沢規矩也氏蔵書**〕昭和26・28両年度科学研究交付金により，長沢規矩也氏の蔵書約3,000冊を購入した。その内容は明清時代の戯曲小説類で，貴重書も少

なくなく，中国文学研究上重要な資料である。昭和36年11月本研究所創立20年に当り，同氏から約150冊の補充を得るとともに双紅堂文庫分類目録を刊行した。

〔**清野謙次氏旧蔵書**〕昭和27・28両年度科学研究費交付金により，清野謙次氏旧蔵洋書570冊を購入した。人類学・考古学関係のものを根幹とする貴重なコレクションである。

〔**矢吹慶輝氏旧蔵書**〕昭和27年度科学研究費交付金により，矢吹慶輝氏旧蔵洋書約360冊を購入した。英・仏・独のマニ教関係の文献がその中心をなし，他に仏教遺跡の発掘報告書も含まれている。

〔**下中文庫**〕本文庫は下中弥三郎氏の寄贈にかかる。昭和28年1月より32年6月に至るまで，戦後出版の中国書4,500冊，中国雑誌10種及び戦後出版の東洋関係洋書130冊を受贈した。特に中国書はその主要なものをほとんど網羅し，戦後の中国研究に対し重要な資料となるものである。

〔**東京銀行調査部所蔵資料**〕昭和34・35両年度にわたり東京銀行調査部所蔵の経済関係書を主とする和洋書・資料類約18,000冊の寄贈を受けた。

〔**仁井田陞氏旧蔵書**〕本研究所元所長仁井田陞氏の逝去（昭41・6・22）後，所蔵の中国書5,000冊，和書2,200冊，洋書120冊，清代公私文書類900余点，50基の碑文拓本を受入れた。これらの図書資料は，大木文庫とともに旧中国の社会研究に極めて重要なものである。

そのほか，昭和33年度から3カ年にわたって文部省「アジア地域の社会・経済構造」総合研究の一環として，その資料（主として洋書）1,800冊を購入し，さらに昭和36年度から40年度まで文部省機関研究および特定研究「アジア社会の近代化と文化の変動」により継続して蒐書に努めて，総数4,771冊に達した。

〔**倉石武四郎氏旧蔵書**〕昭和50年度末に至り，本学名誉教授故倉石武四郎氏の漢籍を主とする蔵書を収蔵することとなり，一部はすでに購入したが，今後継続して整理選択して受入れる予定である。

○未整理の収蔵品として

中国古銭・銭笵約1,270点，瓦當約110点のほか，殷墟出土甲骨片，鏡・戈・

鏟等青銅器，玉器・石器・土器，磚・磚製買地券，壁画片・俑・仏像，服装・室内装飾品・土俗品等計約120点がある。

〔附〕図書の利用状況

本研究所図書の利用は逐年増加の一途を辿っている。ここにその推移を見るために，昭和47年度から50年度までを併記すると下記のとおりである。（学内利用者数字には本研究所教職員の利用数を含まず）

昭和47度	閲覧	学内	1,668人	学外	1,569人	計	3,237人	閲覧・複写取扱図書総冊数
	複写	〃	436	〃	433	〃	869	54,575冊
昭和48度	閲覧	学内	1,877人	学外	1,798人	計	3,675人	〃
	複写	〃	506	〃	556	〃	1,062	64,485冊
昭和49度	閲覧	学内	2,341人	学外	2,039人	計	4,380人	〃
	複写	〃	696	〃	729	〃	1,425	80,504冊
昭和50度	閲覧	学内	2,454人	学外	2,313人	計	4,767人	〃
	複写	〃	726	〃	808	〃	1,534	76,811冊

3 収蔵資料

A 汎アジア人文地理学部門

1 西アジア関係 昭和45・47・49年に実施された西アジア農村の現地調査のさいの写真（スライドおよび焼付写真），その機会いらい収集を続けている各種縮尺の，航空用地図，地図形および航空写真，西アジア農業・農村関係文献（複写による）および文献カードなどである。

2 日本国内関係 昭和45～50年に行なわれた農山漁村・過疎地域の実態調査で収集された地図および文献資料であり，いずれも分類，カード化されている。

B 東アジア美術史考古部門

中国絵画の写真原版，焼付写真，カラースライド等。その主たるものは，日本に現存している宋元時代の仏教絵画に関する資料で，それらは過去十数年にわた

る日本国内の調査研究活動の成果である。また，米国およびカナダの美術館・個人蒐集家が所蔵する中国絵画約1,800点に関しても，原版・引伸写真・カラースライド等が完備しており，近年中にこれらの写真資料にさらに欧州・東南アジアの資料を加える計画があるので，その計画が完了すれば，中国絵画史研究に関する資料センターとしての性格が完備することになる。また，米国ミシガン大学アーカイヴより購入した中国絵画の焼付写真，東京国立文化財研究所原版からの中国絵画の焼付写真等があり，現在でも中国絵画に関する写真資料の集積は世界有数の質数を備えている。

C　東北アジア部門

殷周青銅器資料（器影・拓本・実測図）

公私博物館および個人蒐蔵の青銅器につき調査を行ない，器影，銘文・紋様の拓本，実測図を作製し，また，永年，京大人文科学研究所考古学研究室に集積された考古資料のうち，青銅器関係資料の複製化を計り，現在1万枚を越える資料集積を行なった。また，既刊青銅器資料の写真カード化を計画し，約27,000枚の作製を終えた。

D　西アジア遺跡発掘調査関係資料

人類文明の起源，東亜および日本古代文明の源流としての古代イラン文明の研究を目的として，昭和31年以来，東京大学イラク・イラン遺跡調査団がイラク・イラン両国における遺跡14箇所の発掘・調査の結果収集したものである。その数は数万点に達し，これらはここ数年来各国が遺物の分与，流出を厳禁している今日では甚だ貴重な資料である。特にその大部分は発掘品で考古学上第一級資料であることに意義がある。

1　石器類。旧石器時代から新石器時代におよぶ各種の石器。特に半月形石刃や梯形石刃が数千点に達している。

2　土器類。数万点の多種多様の有文土器片と完形品は新石器時代の文様研究上ばかりではなく，当時の生活や宗教を考える上の重要資料である。また，青銅器時代末期からパルティア時代の遺跡デーラマンからの灰黒土色

や赤褐色土器の完成品を多数所蔵し，中に中国の黒陶類似のものもあり学界の注目を受けている。

3　骨角器。数は少いが，錐，針，篦 等がある。

4　銅製品。主として前記のデーラマンから出土した数十本の銅剣，銅矛，銅鏃などの利器の外に鏡，轡，皿，鉢，釧，指輪，安全ピン，胸当，針，髪飾のピン，動物像などがある。

5　鉄製品。デーラマンの古墓から出土した鉄剣，鉄刀子，鉄矛が多数ある。

6　金銀製品。金製帯，金製装身具（ペンダント，首飾用の玉類）などがある。

7　ガラス製品。ガラス瓶，ガラス玉等。

8　玉類。瑪瑙製，トルコ玉など，石質の種類は少ないが数は多い。

9　建造物類。ドウラ・ユーロポスの騎馬人物のストッゥコ，同じく壁画断片，パルミラの建築装飾断片，ペルセポリスなどの建築装飾品断片などがある。

10　其の他。印章類，形象土器，イスラム陶器など多数所蔵している。

V 研 究 活 動

A 部 門 研 究

1 汎アジア経済

——アジア諸国経済発展と農業——

教授　山田三郎，助手　原洋之介，

研究担当　逸見謙三，荏開津典生，秋野正勝，

研究委嘱　鈴木忠和，館斉一郎，谷口興二

本研究班は，昭和46年度までは川野重任前教授を主体として「低開発国経済発展の基本過程」という課題のもとに組織され，山田，逸見，鈴木，館のほか，研究委嘱として滝川勉，荻原宣之，古賀正則も加わって，インド，フィリピン，韓国，台湾などを中心として，他方面から開発途上国経済の基本的発展過程の分析が進められ，その成果は，川野『農業発展の基礎条件』，川野編『アジアの近代化』，山田編『韓国工業化の課題』などに発表された。

昭和47年度からは，これまでの班研究の成果をふまえ，アジアの開発途上諸国経済における農業の重要性を特に重視して，班の共通研究課題を「アジア諸国経済発展と農業」とし，山田を班主任として，上記メンバーの外，速水佑次郎，今岡日出紀（共に現在海外出張中）も研究委嘱として班に加かり，農業を中心としてアジア諸国の経済発展の問題に取り組み，現在に至っている。

山田は「アジア諸国農業成長過程の比較分析」を中心テーマとしてアジア諸国農業の国際比較を行なって，各国農業の特性やその国際的位置付けを明らかにし，「アジア農業の生産性と生産構造」，「アジア農業の投入産出構造と発展のパターン」，「農業生産性の国際格差とその変化」などを発表した。原は，「経済発展の機構の実証分析」を課題として，主にインドネシアに焦点を合せ，「インドネシアのインフレーションと経済成長」，「インドネシアにおける政治的リーダ

ーシップと経済政策」，「インドネシアの米穀経済と技術移転」，「ジャワ米穀経済への高収量品種の移転・普及・定着」などを発表した。その外，逸見は農産物貿易，鈴木は経済発展と教育，館は人口と経済開発の問題を総合的に追求し，速水は台湾とフィリピンを中心とした農業開発問題，荏開津は東アジアの労働力問題，今岡は中国の資本蓄積と農業発展との関係，谷口はタイの農産物流通問題をそれぞれ研究の対象として研究を続けてきた。秋野はアジア諸国の農村開発の可能性を日本の経験との比較において追求しているが，これには山田や原もとくにアジア諸国の現状の分析の立場から協力し，共同研究として分析を進めつつある。

2　汎アジア人文地理学

教授　大野盛雄，助教授　田中紀彦，助手　後藤　晃

アジアを理解する手だてとして，とぎすまされたメスがふるわれるように，きわめて専門的な分析の視角から鮮明な断面をえぐりだすことが望まれるとともに，同時に諸現象の錯雑した実態を多角的，総合的に判断する視角を課題としてもつのが人文地理学であろう。

こうした前提に立って大野は，人間集団が自然に対決することによってくりひろげられる生産，生活の営みの再生産の総過程を広義の生活様式論としてとらえるという立場から経済過程，社会過程，文化過程の総合的把握を試みようとしてきた。さらに，この生産，生活の営みの再生産の総過程の実現の場がきわめて端的に村落という形で現われることから，この視角は同時に，具体的には農村研究という方向をとらせることになる。「アジアの農村」，「西アジア農村の人文地理学的研究」の両共同研究は，こうした前提の具体的な活動ということになる。またこの生活様式の比較研究は，比較文化論の展開となった。

この研究班は，3年次にわたる西アジア農村の現地調査とその後の資料整理・研究成果のとりまとめを主としつつ，国内の農山漁村・過疎地域の実態調査などを合わせ行なってきた。研究班のメンバーは大野を中心として，田中（47年），後藤（48年）が加わり，それ以後の異動はない。この結果，これまで大野が生活様式・比較文化の視角から対象としてきた，農村＝アジアの基本的地域社会の研

究に，新たな分析視角，すなわち農業の地域構造・都市と農村の地域関係・農法および生産技術などの側面への接近が可能になった。

3　汎アジア文化人類学

教授　中根千枝，助教授　松谷敏雄，助手　伊藤亜人，
研究委嘱　末成道男，佐藤信行，崔吉城，嶋陸彦

部門研究としての研究班であるが，昭和47年以降のテーマは，農村にみられる諸集団の構成，構造の比較研究である。主たる対象地域として韓国農村をとり上げ，昭和51年度で一応成果をまとめる予定である。

本韓国農村研究は韓国の文化人類学者と密接な協力体制をもちながら進めてきたもので，昭和48年には，その一端を『東洋文化』の特集号「韓国農村調査」（53号，昭和48年3月）として刊行した（後にこれは単行本『韓国農村の家族と祭儀』東大出版会，同年10月に出版された)。この研究成果をふまえて，昭和48年には，韓国文化人類学者との共同プロジェクトとして洛東江流域にある安東の実態調査を行った。昭和49～50年度には，伊藤は珍島の再調査を，末成は韓国農村との比較のため台湾の漢人村落の調査を行い，中根は中国，インドを訪れ，比較研究に関する考察をすすめた。同時に，韓国の前記合同調査の結果をまとめることに力を注いだ。松谷はイラン，イラクの調査にもとづき，乾燥地帯における水と村落の問題にとり組み，51年度は調査隊の一員として現地に過すこととなった。

昭和51年度より研究班のメンバーとして，在京の韓国文化人類学者，崔吉成氏，最近2年間の韓国農村調査から帰国した嶋陸彦氏の2人を加え，韓国研究として本格的な段階にはいった。本年4月より毎月2回研究会を開いて活発な討論が行なわれている。崔吉城の韓国の特殊職業集団（ムータン）の分析，伊藤の珍島における契の研究，末成の韓国と台湾漢人農村における経済・労働の組織などの報告に基いて，密度の高い社会人類学的な討論を行い，それぞれの研究を発展充実させると共に，他の社会との比較をふまえた韓国社会の構造的特色を明らかにしようと努力している。

4　東アジア政治・法律

――中国の法と政治――

教授　関　寛治，助手　森山茂徳，
研究担当　坂野正高，衛藤瀋吉，平野健一郎，
滋賀秀三，研究委嘱　藤井昇三

本研究班は，始め昭和43年に，関，坂野，衛藤，藤井をメンバーとし，「中国をめぐる国際政治」という主題をかかげて組織された。近現代中国の政治過程を国際環境の中で把握することを目的とし，光緒年間からワシントン体制下までが広く分析の対象とされ，こうした問題関心に基づき各人が成果を発表してきた。

その後，こうした中国をめぐる政治過程の分析をこえて，さらに，中国の法の実態把握，東アジア国際関係における文化接触，植民地化過程，の分析の必要が考えられ，滋賀，平野，森山がメンバーに加わった。

坂野は，この間，清末における中国の政策決定機構と外交実務家とを分析対象とし，とくに李鴻章の幕僚であった馬建忠について，様々の角度から分析を試みた。「馬建忠の海軍論」「馬建忠の鉄道論」"Ma Chien-chung, a frustrated French-trained early reformist: his views on diplomatic service and naval training," "Ma Chien-chung's views on modern railways: two treatises of 1879"などの一連の論文が，その成果として発表された。衛藤は，この間，とくに現代の日本と中国の対外政策，日中関係について分析し，これを国際政治体系の変動の中で位置づけした。これらの分析は，『国際社会の変化と日本――日本の対外政策シミュレーション・モデル』『国際社会の変化と日本――文化摩擦と国際関係』という著書として，また「日本における対外政策決定」「北京政府の対外イメージ」"Postwar Japanese and Chinese Relations"などの論文として，発表された。平野は，東アジア国際関係における文化接触の問題を基礎に見すえ，中国の東三省及びその財政基盤についての分析を行った。「満州国協和会の政治的展開――複数民族国家における国家統一と国民動員」"China in Japan-U. S. Relations: From 'Nishihara Loans' to the New Four Power Consortium"

などの一連の論文がその成果として発表された。滋賀は，この間，中国における法の実態を，裁判準則という視角から，様々の角度で分析した。「清代の司法における判決の性格——判決の確定という観念の不存在」"Criminal Procedure in the Ch'ing Dynasty —— With Emphasis on its Administrative Character and Some Allusions to its Historical Antecedents" などの一連の論文がその成果として発表された。また，坂野，衛藤，滋賀は，『近代中国研究入門』に，共編著書として参加した。藤井は，この間，ワシントン体制下の中国の平和問題を分析の対象とし，日中関係や中国共産党の活動について様々の角度から分析した。「ワシントン体制と中国——北伐直前まで」「中国からみた幣原外交」「戦前の中国と日本——幣原外交をめぐって」「1930年代の中国共産党と三民主義」などの一連の論文がその成果として発表された。関は，中国をめぐる国際政治体系の変動を，その平和の条件を基礎にすえて，構造的に様々の角度から分析した。森山は，東アジアにおける国際関係を，とくに朝鮮植民地化に焦点をすえて分析しつつある。

本研究班は，各人のこうした蓄積をふまえて定期的に研究会を催し，中国をめぐる東アジアの政治と法の諸問題をさらに分析していく計画である。

5　東アジア歴史

——東アジアにおける変革とその歴史的基盤——

本研究班は，研究の特殊化に伴ない，昭和49年度から下記のごとく2組に構成された。

(1)　律令制の比較史的研究

教授　池田　温，研究担当　西嶋定生，武田幸男，土田真鎮，窪添慶文，研究委嘱　堀　敏一，青木和夫，平野邦雄，岡野　誠

この班は，中国史を中心に日本・朝鮮史の専門家を加え，古代国家構造の特質とその変革を追求するため，律令制を中心に支配体制の分析をすすめ，48年度以降定期的に唐律疏議と養老律の会読を行ない，あわせて東アジア古代史研究者の

情報交換と研究の深化をはかっている。また西嶋は東アジア古代史の総合的把握に努め，池田は古文書資料の分析を通じ律令制の実態を追求し，窪添は北魏の国家構造を検討し，岡野は禁婚親の規定など唐律の立法史的研究を行なった。堀は均田制の研究をまとめて公刊し，武田は新羅の律令制形成を解明しつつあり，青木は日本の古代豪族の性格を論じ，平野は古代日本における朝鮮系渡来人の役割を追求し，土田は日本古代律令制の衰退過程を考察した。

(2) 中国近代の変革と諸前提

教授　佐伯有一，助手　小杉修二，研究担当　田中正俊，古島和雄，小島晋治，研究委嘱　柳田節子，小山正明，菅沼正久

この班では変革の前提構造解明のため，50年度から当研究所所蔵の江蘇省宝応県の地主王氏等家伝の一連の諸契類100通余（19世紀中心）の読解作業を日常的な研究活動として継続している。また，柳田は年来の宋代佃戸制についての研究に再検討を加え新しい方向を切り拓きつつあり，小山は明清時代の賦役制度の変革及び奴婢問題を検討して中国封建制の解明を深化した。佐伯は裁判権問題を通じて旧中国の権力の問題を追求しつつあり，小島は太平天国以後の農民運動の研究と日中関係史の問題発掘に努力し，田中は19世紀における世界市場との関係において中国農村経済構造に検討を加え，小杉は1920年代における労働運動，戴季陶主義及び国民会議運動の考究を通じて蔣介石政権の形成過程を目指している。古島は中国革命後の農村の変革を追求しつつ，従来の官僚資本研究の再検討を継続して行ない，菅沼はひきつづき企業管理・地方小型工業などを通じて社会主義経済の特質を追求した。

6　東アジア美術史・考古学

——米国所在中国絵画に関する実証的研究——

教授　鈴木　敬，助教授　戸田禎佑，
助手　嶋田英誠，研究委嘱　川上　涇，海老根聡郎，
小林　忠

本研究班は，はじめ「中国絵画の伝統と創造」という主題をかかげて組織され，43年より，より集中的な研究課題である「宋元仏画研究」を共通の主題とするよう再編されて，日本国内に現存する宋元時代の仏画遺品に関する調査研究を続けてきた。その結果，蒐集された資料は国際的にも注目されてきており，調査研究活動の一つの結論ともいうべき「元代道釈人物画展」が東京国立博物館で昭和50年２月に開催された。「宋元仏画研究」によって集積された資料は単に宋元仏画ばかりではなく，所謂“古渡り”の中国絵画にまで及び，日本に現存する中国絵画資料のかなりの部分をカバーするようになったので，51年度よりは班研究の主題を「米国所在の中国絵画に関する実証的研究」と改め，50年度後半に米国・カナダ両国で行なった中国絵画の調査活動によって得られた資料に基づく研究活動に入った。

米国およびカナダ両国の中国絵画調査は，52年度に予定されている欧州および東南アジア所在の中国絵画調査と一連のもので，中国絵画史研究に不可欠の写真資料の完備を目的としたものであり，50年の調査によって，北米大陸分に関しては，世界で最も充実した資料の集積を行なうことが出来た。現在これらの資料に関してそれを研究に供することが出来るよう，索引の製作，写真カードの完備，カラースライドのネームの記入等を行なっており，これら基礎的な作業が終了した段階から個々人の主題にそった研究が進行することになるわけである。

7　東アジア哲学・宗教

—— 中国の思想と宗教 ——

教授　鎌田茂雄，助教授　蜂屋邦夫，
研究委嘱　塩入良道，泰本　融，福井文雅，
江島恵教，劉文献，蔡沢洙

本研究班は，中国・インド・日本・朝鮮などの地域を対象とする思想史・宗教史の研究者によって構成され，とくに中国の思想・宗教の解明を中心的課題としている。そのため，儒・仏・道三教それぞれの，文献・教理の基礎的研究をおこなうとともに，三教交渉史の究明に注力している。

49年3月以前は，窪徳忠主任を中心に，道教の改革派たる全真教と，道教の日本伝播の問題として沖縄の習俗について検討し，その成果の一端として，窪に『増訂　沖縄の習俗と信仰——中国との比較研究——』（東大出版会　49・3）がある。49年3月，窪主任の退官にともなって鎌田が主任となり，以後，六朝隋唐における三教交渉史を中心に研究を推進している。研究委嘱としては，49年から平井俊栄（2年間），50年から福井・劉，51年から蔡の各氏に参加していただいた。

鎌田は，唐代の仏教と道教の研究をおこない，とくに華厳宗の第五祖宗密を中心に研究をまとめ『宗密教学の思想史的研究』を刊行した。他方，中国の仏教儀礼に関する調査をすすめ，ここ数年にわたって，個人研究欄にあげた如き成果を発表した。蜂屋は，全真教教理の一面を明らかにし，ついで溯って六朝における三教の関係を『弘明集』などによって検討し，その内的連関を把握して発想の中国的特質を抽出せんと試みている。福井は，フランス東洋学の実証的学風をふまえ，六朝の道教について多方面から検討しており，さらに，より広く比較思想の問題にも関心をもち，方法論について「比較思想の方法論について——対比研究の問題点——」（50年『フィロソフィア』63号）を発表した。塩入は，中国仏教における懺法の成立過程を研究し，51年3月，本学に『中国仏教における懺法の成立』と題する学位請求論文を提出した。中国の天台教学についても巾広く研究をおこない，「法華懺法と止観」（岩波書店『止観の研究』　50・11）その他を発表した。

ところで，本研究班は，かかる三教交渉史研究に不可欠の，インド仏教との関連という問題につき，従来から，泰本・江島両氏の協力を得ている。泰本はインド論理学の研究をすすめつつ，中国三論宗に関する注釈的研究をおこない，研究体制に寄与した。最近の論文としては,「法の批判的分析と菩薩の観法——吉蔵『中観論疏』（法品）を中心として——」（春秋社『仏教における法の研究』50）などがある。江島は，インドの後期中観学派の研究，とくにBhāvavivekaに関する研究をすすめ，すでに「Bhāvaviveka研究——空性論証の論理を中心として—

Ⅰ，Ⅱ」（『東洋文化研究所紀要』　51，54。45・3，46・3）を発表し，さらに研究の深化につとめている。最近の成果の一つに「空とニヒリズム」（『理想』　51年3月号）がある。

さらに，三教交渉史以前の，中国の伝統思想の問題について，劉氏の協力を得た。劉は，文献学的方法によって，すでに『漢石経儀礼残字集証』（嘉新水泥公司文化基金会　44・8）を発表しており，最近では，「先秦古籍中的“礼”」（『暖流』第15期，東京大学中国同学会発行，49．4）があるが，本研究班では，先秦の諸思想を言語との関連において追求した。

平井は，49・50の両年度本研究班に参加し，中国仏教の歴史と思想の研究をおこなった。とくに吉蔵を中心とする三論学派の教学を体系的に把握し，その成果として，学位請求論文『中国般若思想史研究――吉蔵と三論学派――』（春秋社，51・3）を刊行した。また，葵は，中国仏教の伝播の問題の一環として，新羅における受容形態を検討している。

8　東アジア文学部門

(1)　東アジア文学――明清思想研究――

教授　尾上兼英，助手　岡本サヱ，

研究委嘱　溝口雄三

本研究班は，明清間の中国文学の新たな展開の基底をなしていた，中国思想界の変革の動向を究明し，この時期の思想と文化，思想と文学の相互関連について文学研究上必要な展望を得る目的で，1972年度に組織され，尾上の統括の下で研究会を開き，文学部門関係者が参加して，討論してきた。このうち，溝口は「明末にみられる思想の屈折と転換」の問題を明らかにするため，主として明末の変革思想家李卓吾と同時代の文学界の革新派たる「公安派」との思想的関連の研究を担当している。また，岡本は同じく明末に西学との接触を通じて思想界変革の機運の一翼を担った，一群の知識人，文人の生活態度，思想傾向を検討すると共に，清代に及び，この派の文人の著作が禁圧されるに至る経過，およびその社会的背景等々，全体として明末清初間の中国側の「西学輸入の基盤」並びにその変

化の状況を追求している。

この間，本テーマに関し，溝口は，「明末を生きた李卓吾」1971），『（李卓吾）焚書』抄訳（1971），「公安派の道」（1974）を，また岡本は，「中国における最初のヨーロッパ観」（1974），"Un renouveau refusé"（1975），「貳臣論」（1976）を発表した。

(2) 東アジア文学 ——戯曲小説研究——

教授　尾上兼英，助教授　田仲一成，
研究担当　傳田　章，平山久雄，
研究委嘱　青山　宏

中国近世戯曲，小説は，宋元時代の都市の盛り場での語り物，歌いものに源を発し，明代に至って文人の加工の下に，長編に再編成されていくが，この変化は，戯曲，小説（講釈）の上演，講演の場が庶民の盛り場から，縉紳の家堂に移り，それを支える享受者の層が農民，小商人から地主，大商人へと転化してきたことに相応するものと考えられる。金代の唱いもの（諸宮調）「董解元西廂記」を改作した元代戯曲の代表作，『西廂記』が，明代に入って多数のテキストを派生させつつ，全体として，その文辞に文人風の加工潤色が加えられていく過程にもまた，このような元明間の戯曲小説における社会的基盤の変化の動向を反映するものがあると考えられる。

本研究班は，このような観点から，1972年度発足以来，毎週一回『西廂記』会読を通じ，諸テキストの変遷，註釈の重点の変化などを追跡している。メンバーのうち，傳田は『西廂記』諸異本の蒐集，本文異同の比較の問題，田仲は『西廂記』諸本註釈の蒐集とその重点変化の問題，尾上は『西廂記』の演変及び作品構成の問題をそれぞれ担当し，青山が詞曲語彙研究の側面から，また平山が「西廂記」諸注附載の「音釈」解読の側面から，会読作業を支援している。この間，本研究に関し，傳田の「明刊元雑劇西廂記目録」（1970），青山の「花間集索引」（1974）が基礎資料として活用されている。

(3) 東アジア文学 ——1930年代文学の研究——

教授　尾上兼英，非常勤講師　芦田　肇，

研究担当　丸山　昇，研究委嘱　伊藤虎丸

中国の所謂「文化大革命」以後，中国現代文学史における政治路線と文学運動との関連の上で，特に1930年代の文学史を原資料に即して再検討してみる必要が痛感されるに至った。本研究班は，このような情勢の下で，1972年度にそれ迄の「中国の思想と文学」班を改組する形で組織され，毎週一回，30年代文学資料の会読を行なうことになり，発足当初は左連関係機関誌，次いで沈起予，魏金枝，丘東平，戴平万，柔石，洪霊菲，揚邨人，葉紫らの作品を検討し，当時の作家の活動を忠実に追跡することに努めてきた。その間，随時，研究報告，あるいは同時代に活躍した日本の文学者，藤枝丈夫，鹿地亘氏らの回憶談を聞く会を開くと共に，近時は関西の中国現代文学研究者のグループとも交流を試みている。メンバーは時により若干の出入はあるが，主要メンバーについていえば，1930年代文学者群のうち，丸山が「左翼作家連盟」系作家を，尾上が「文学研究会」系作家を，伊藤が「創造社」系作家を，分担し，別に芦田がこの時期の文学運動，文芸理論の動向を追跡することによって，主要課題の総合的な把握に寄与している。その成果は，『東洋文化』52号（1972），同56号（1976）の2回にわたる「1930年中国文学の研究」特輯号に中間報告として発表した外，丸山「周揚著訳論文，周揚批判論文・目録」（1969），伊藤「郁達夫資料」「同補篇（上）(下)」（1969～74），尾上「1930年代中国文芸雑誌（一）」（1971）など基礎資料の蒐集整理にも努めている。

9　東北アジア

——西周時代史の総合的研究——

助教授　松丸道雄，助手　持井康孝，

研究委嘱　宇都木章，小倉芳彦，後藤均平

本部門では，専任教官1名の欠員を補充しえない状況，および松丸が昭和49年度1ヶ年にわたり京大人文科学研究所に流動研究員として出向したため，東アジア歴史部門と合同で研究班を組織した。この間，松丸は人文研の金文弁偽研究班

（主任林巳奈夫）において西周金文の弁偽問題を中心に研究を行ない，合せて関西における青銅器調査と人文研考古資料中の青銅器資料の複製を行ない，約一万点の資料を本研究所に持ち帰った。

昭和49・50年度においては，独立の研究班を組織，「春秋戦国期列国の総合的研究」を，文献面では宇都木，小倉，後藤，考古学面では，関野雄，飯島武次（いずれも研究委嘱）の協力をえて，出土文学史料（金文・石刻類）の検討を中心に，研究を行なった。

上記の研究を進める上で，どうしても西周後期にまで問題を溯らせて考えていく必要を感じたところから，昭和51年度からは，研究テーマを「西周時代の総合的研究」と改め，春秋列国の形成期としての，これに上接する西周後期を中心に，金文研究を行なうこととした。また，この年度より，持井康孝が助手に採用され，部門研究の編成が容易になった。

西周時代史研究にとっては，中心となる金文ないし青銅器資料の網羅的蒐集と整理が不可欠であるが，従来そのような作業の上にたった研究は，行なわれたことがなかった。本研究班では，その意味で，研究の基礎を確立するため，従来刊行された全資料の写真カード化を行ない，約27,000枚を作製した。今後これを整理することにより，従来の研究に新生面を拓くための資料整備が集中的に行なわれている。

10　東南アジア経済・社会

教授　松井　透，非常勤講師　池端雪浦，
助手　白石　隆，研究担当　高橋　彰，永積　昭，
研究委嘱　加納啓良

本研究班は，昭和49年に組織が着手され，近現代東南アジアの経済・社会過程を，その多様性にもかかわらず，研究領域の孤立化に陥らぬよう注意しつつ，解明してゆくことをねらいとしている。この場合東南アジアにおけるナショナルなものが，各地の様々の文化的土壌・社会経済的基盤の上にどのような特質をもって形成され発展してきたかを，比較的長いタイム・スパンをとって比較検討する

ことが目標となる。もちろん，東南アジアにおいてはナショナルなものの発展は，コロニアルなものとの対抗関係を抜きにしては論じえない。また，「ナショナルなもの」「コロニアルなもの」といっても，単に政治的思想運動としての民族主義・植民地主義を考えるばかりでなく，植民地化の社会経済的側面や，経済的自立の達成・国民形成——いわゆるネーション・ビルディング——などの視野の中に収めておかねばならない。また，より具体的には日本および日本人の東南アジアとの関係，東南アジアにおける行動を，とりわけ両者の間に介在するアンビヴァレンスに留意しつつ，歴史的文脈の中で検討することを忘れてはならない。さらにまた，研究の基礎作業となる長期プロジェクトとして，東南アジア諸国の統計資料を，できる限り長い時系列の形で，収集整理することを考える必要がある。たとえば，1870年以降，域外諸国の東南アジアに対するアプローチの多様性にもかかわらず，全地域的な社会経済変動が生じている。これを比較史的に分析する手がかりとなる統計資料を組織的に収集し，整理する必要がある。

以上のような論点をめぐる論議を重ね，研究作業に着手しているが，班組織後日が浅いので，班としての成果発展には至っていない。

11　南アジア政治・経済

——インドにおける支配体制と社会構造——

教授　荒　松雄，山崎利男，松井　透，

研究担当　辛島　昇，長崎暢子，

研究委嘱　中村平治

本研究班は，インドの各時代の政治，経済，社会，宗教，思想の特質を明らかにしながら，全体としてインドの歴史の展開・変貌を究明することをめざしている。

古代・中世については，山崎は4～12世紀インドで作成された銅板文書の内容を分析し，それに基づいてこの時代の歴史を考察している。荒は13世紀以後のトルコ系ムスリムの王権すなわちサルタナット，およびそれにつづくムガル帝国の支配体制と社会構造について，とくに宗教と政治，社会との関連に重点をおいて

研究をすすめている。辛島は南インドのチョーラ朝とヴィジャヤナガル王国の歴史について刻文を資料として研究している。

近・現代については，松井は19世紀を中心としてイギリスのインド植民地支配の思想史的考察をおこない，同時に19世紀後半から20世紀にかけての北インドの農産物価格の変動の研究に従事し，それによって植民地支配下の農業の発展と村落生活の変化を検討している（紀要64）。長崎は1856年のシーパヒーの反乱の研究をおこない，とくにデリーに樹立した政権について，ムガル皇帝との関係，行政会議の構成と政策，農民との結びつきを検討した（紀要64，69）。山崎は植民地支配下インドの法と司法について研究を進め，インド人の司法制度論として最初のラームモーハン＝ローイの論説を考察した（紀要64，67）。中村は独立後インドを対象として研究しており，会議派支配の諸段階の特質，インドの多民族統一が直面する課題を検討するとともに，インドと中国との外交関係の推移を論じ，その特質を明らかにした。

12　西アジア歴史・文化

教授　深井晋司，助教授　中村廣治郎，松谷敏雄，
研究委嘱　杉山二郎，佐藤次高，黒田和彦

本研究班は，昭和44年4月に「西アジア歴史・文化」部門が新設され，深井が班主任となって出発した，45年度からは中村が加わり，佐藤と共に特にイスラム期の研究を担当することになった。

昭和46，47年度には，深井はパルティア・ササン王朝美術の特質の諸問題を，松谷はイラン高原における初期農耕村落の研究を，黒田は古代西アジア史におけるハンムラビ時代の社会と文化の問題をそれぞれ追求した。その間，松谷は「イラクの先史時代遺跡出土の遺物の調査」の課題の下に，8カ月間イラク共和国バグダードで現地調査を行なった。他方，イスラム期については，中村がガザーリーを中心とするイスラム神秘主義の思想構造の解明にあたり，その間，昭和47年には約5カ月間イラク共和国バクダードにおいて資料の収集と現地学者との意見交換を行なった。佐藤は，歴史学の立場から，エジプトのマムルーク朝を中心と

する封建制度の研究にあたった。

昭和48，49年には，深井は前年の研究を一歩進めて，パルティア美術の特質とその展開過程の問題を究明し，松谷は，イラン高原における初期農耕文化を中心として，「人類文明の起源」の問題を追求し，黒田は一貫してハンムラビ王朝の社会の構造的特質の解明に努めた。中村は，イスラム史における「共同体」の重要性に鑑み，その思想的特質の解明にあたり，佐藤は，エジプトを中心とする西アジアの村落構造に視点をおいて，中世イスラム社会の研究にあたった。その間，佐藤は，49年には約6カ月間，中東各地に滞在して，現地学者の研究状況の把握に努めた。

昭和50年度には，深井はパルティア美術の特質とその発展を，墳墓出土の遺物の整理・研究によって跡づけ，松谷，黒田は前年度の研究を継続した。他方，中村はガザーリーの社会思想の解明を目指しつつ，その背景としてのイスラムの政治論・法理論の研究にたずさわり，佐藤は，中世以後の農業政策論の研究にあたった。

昭和51年度には，深井は「ササン王朝美術の特質とその発展」の研究を目指し，また，松谷は「メソポタミアにおける農耕文化の起源」を追求する目的で，76年5月より約9カ月にわたるイラク・イランの発掘調査を行なうことになった。この調査には，本年度より杉山二郎が「ササン王朝時代の摩崖浮彫」の研究のために加わることになった。黒田，中村，佐藤はいずれも前年度の研究課題を追求してゆく予定である。

B 共 同 研 究

1 第三世界のなかのアジア

——平和学構築の諸条件——

教授 関 寛治，助手 森山茂徳，

研究担当 石田 雄，坂本義和，研究委嘱 白鳥 令，

森 利一，高柳先男，非常勤講師 長井信一，

大西 昭，高畠通敏，西川 潤

本研究班は，1968年より「開発途上国の政治変動と国際環境」をテーマとして成立したが，その後メンバーに若干の移動をともないながらテーマも「新興諸国の政治変動と国際環境」を経て1975年度より「第三世界のなかのアジア——平和学構築の諸条件——」へと脱皮・発展した。このような変化は，代表者，関が「日本平和学会」の1973年における創設による初代会長就任と並行して，第三世界の平和学を開発する方向へと研究の中核を徐々に移行させたこととも無関係ではなかった。

この間，関はまた1974年より75年まで特定研究「広域大量情報の高次処理」のうち「政治社会事象の予測におけるコンピュータの利用とその組織化」の代表者ともなり，このプロジェクトの中でシミュレーション・システムの開発，SPSSの東大大型計算機用および広島大学計算機用のための置き換え作業等の統括を行なった。74年中はとくに上記プロジェクトと本研究班との共同による研究会をも開催した。74年中はその外，研究所の全体懇談会とも協力し，当研究班は三回にわたり「第三世界における平和の条件」というテーマで研究発表を行ない，研究班の研究進捗状況を披露した。すなわち，(一)として関，高柳が「その理論的考察」を行い，(二)として西川が「経済自立の思想」を第三世界の学者の見地を中心として展開し，(三)として森が「インド核拡散の論理と現実」，高畠がタイ，インド，トルコを事例としてとりあげ，「アジアの民衆運動」の比較を行なった。研究

班におけるデータ・バンク建設構想は73年研究会に招待したヨハン・ガルトング（オスロー大学平和学教授）との共同研究としてその可能性を考究中である。

75年にはいり，本研究班は，その研究の中核を平和学構築の諸条件に移したため，現在各研究者の研究内容も一新し，あたらしい展開の方向に向いつつある。すなわち，高畠は，第三世界における民衆運動を米国，西欧の民衆運動との関連でより広く深く追求する方向を切りひらき，その基礎理論として『政治学への道案内』（1976年，三一書房）を刊行した。石田は，「第三世界と比較政治文化」をメキシコに関する体験をふまえて深化させ『メヒコと日本人』（1974年，東大出版会）を刊行した。坂本は,「未来世界秩序研究プロジェクト」での長年にわたる研究の成果に即して「第三世界と世界秩序」にとりくみ，そこにいたるまでの思考の発展の論理的必然性を『平和――その現実と認識』（毎日新聞社）の刊行によってあきらかにした。長井は,「東南アジア国際関係におけるマレーシアの国民形成」を歴史的研究を通じて追求し，この間，S・チャウラ，M・ガートフ，A・G・マルソー編の「東南アジアと国際政治」の翻訳をも行なった。森は，「核拡散の論理と現実」を第三世界全般のケースにまで拡大して追求中である。大西は，ローマ・クラブが用いたいわゆる「SD法」を用いてインドネシアの反日運動の成長を予測するペーパーを書き，その要約を『地球化時代の日本経済』（1974年，ダイヤモンド社）に発表した後，「第三世界を含む平和国際経済秩序の可能性」を探求するようになり，それについての試論的ペーパーをも提出した。白鳥は，もっぱら国内政治の変動が国際政治とどのような連関構造をもって波及するかについて関心をもち，日本の国内政治変動の可能性とからめて平和学構築の諸条件に光をあてようとしている。それらの成果の一部は『世論・選挙・政治』,『日本における保守と革新』，『日本政治の構造』等，何れも1974年以降日本経済新聞社より刊行された書物の中で展開されている。森山は，76年度より本研究班に参加し，「分断国家」問題としての朝鮮半島における平和の条件を追求していく予定である。高柳は，パリ滞在中のため75，76年はメンバーから抜けたが，パリから見た第三世界の平和理論を探求することに意欲をもやしており，帰国と

同時に本プロジェクトに再参加する予定である。また西川は，本年より一年間メキシコに行く予定で，ラテン・アメリカに関する深い研究成果が期待されている。西川は「第三世界の政治・経済・社会構造の変動」をもっとも広汎に考察分析し，本研究班の中ではもっとも多産であった。すなわち『飢えの構造』（1974年，ダイヤモンド社），『第三世界と日本』（1974年，潮出版社),『資源ナショナリズム』（1974年，ダイヤモンド社),『経済発展の理論』（1976年，日本評論社），『多国籍企業と第三世界』（1976年，毎日新聞社）等が刊行され，本研究班の研究内容に多岐にわたる新鮮な問題提起を行なってくれた。

なお関は，「第三世界の平和理論構築の諸条件」に本格的にとりくみ，この間，日本平和学会から刊行された『平和研究』創刊号の編集を行ない，その中に中村研一と共同で自らも平和学の方法論についてのまとめを執筆した外，『平和の探求』（1975年，時事通信社）を共同編纂して，その中に「平和とは何か」をはじめとした二編の論文の執筆を行なった。また『核廃絶か破滅か』（1975年，時事通信社），『核時代の平和学』（1975年，日本平和学会編）の二冊にも執筆し，その総括を行なった。現在，第三世界の平和理論構築の諸条件としての基礎的研究，「地球政治学」理論の構想に力をそそぎ，その刊行を日本経済新聞社より準備中である。

2　アジアの農村

教授　大野盛雄，松井　透，助教授　田中紀彦，
助手　後藤　晃，研究担当　高橋　彰，
研究委嘱　友杉　孝，大岩川和正，江波戸　昭，
茨口善美，佐藤次高，青木　保

この研究班は昭和44年に組織された。その研究課題は，単位地域社会としてのまた生活様式の体系の実現の場としての，農村の構造に関する実証的な研究をつみあげることを手がかりとして，アジアの社会と文化の現実の姿と発展の方向との理解に近づくことである。このため，現地のことばを使い，住民の生活に密着して，生のデータを集めるフィールドワークを研究の基礎としている。担当者は

それぞれアジアの各地域において長期間の現地調査に従い，その成果を論文・著書として発表する一方，それらの業績の相互批判，分析視角・調査方法等に関する討論を重ねている。

この研究班のメンバーは当初大野，松井，高橋のみであったが，その後友杉，大岩川（以上46年），江波戸，茨口，青木，後藤（以上48年），田中（49年），が加わって，現在11名となった。それにともなって，調査研究対象とする農村は，アジア全域（大野，江波戸），東南アジア（高橋），タイ（友杉，青木），インド・バングラデシュ（松井，茨口），西アジア（田中），イラン（後藤），イスラエル（大岩川），エジプト（佐藤）に及ぶことになった。また，その結果，農村構造の分析視角においても，社会経済構造，社会変化，生活様式，宗教構造，価値意識，比較文化，都市との地域関係など，多様な接近が可能となり，さらに文献研究的立場からのフィールドワークの有効性の吟味，文献研究による中世の農村構造の再現なども試みられることにもなった。

3　東アジアにおける植民地支配と解放運動

教授　佐伯有一，助手　森山茂徳，
研究担当　田中慎一，研究委嘱　戴　国煇，
加藤祐三，小島麗逸，梶村秀樹，安　禹植，
姜　徳相

本研究班は，日本帝国主義の東アジアにおける史的本質と構造および反帝国主義運動の史的脈絡を明かにする目的で編成された。各担当者は，それぞれ，独自の分野で，史料の発掘と整理の作業を行なっており，佐伯は，満洲国政府の土地調査事業，加藤は，中国の土地改革と農村社会の究明を行ないつつ，満洲国成立前後の経済を研究して成果を挙げ，小島は，中国の土地改革と経済建設の特質を究明して世に問うと同時に，満洲国における植民地経済発展を追求している。戴は，台湾における土地政策を中心に植民地支配の構造発展に関するデータの蒐集と分析を精力的に行ない，近く世に問おうとしている。また，梶村は，姜とともに朝鮮の民族解放闘争に関する資料集を世に問いつつ，その特質と具体的展開に

ついて多くの成果を挙げた。安もまた，独立運動に関して，東アジア諸民族との関連の中で，その苦難にみちた道程を明かにしようとしており，森山は，国際関係の側面から，日本の進出を明かにし，田中は，土地問題を通じて経済過程における植民地支配の構造を明かにしようとして，すでに若干の成果を発表している。

4　明代史の総合的研究

教授　佐伯有一，鈴木　敬，尾上兼英，鎌田茂雄，
助教授　戸田禎佑，田仲一成，助手　岡本サヱ，
研究委嘱　小山正明，溝口雄三

本研究班は，研究所の中国研究構成員が，それぞれの専門領域の研究の上に立って，相互に方法論を交錯させつつ，明代史の総過程の把握を試み，そのことによって，各々の専門領域の研究そのものの発展を期待しようとするものである。佐伯，小山は，政治・社会・経済，鎌田は仏教思想，尾上，田仲は，文学・演劇，鈴木，戸田は美術絵画，溝口は儒教，岡本はキリスト教の思想面をそれぞれ分担し，方法論の模索とわが国における研究蓄積を整理するために，定期的に研究会を開催し，討論を続けている。

5　中国古代礼制の研究

教授　尾上兼英，助教授　田仲一成，蜂屋邦夫，
講師　和泉　新，助手　岡本サヱ，
研究委嘱　前野直彬，竹田　晃，戸川芳郎，
今西凱夫，佐藤　保

本研究班は，『儀禮疏』の解読を通して，中国古代の礼制の実態と理念を明らめようとするものである。48年4月に発足して以来，3年あまりの時日をもって，『儀禮』17巻の劈頭「士冠禮」第一巻，『儀禮疏』50巻のうち第3巻まで，ようやくその9割ほどを解釈し終えた。他日，何らかのかたちで，その成果を公表したい。十三経主流の範囲では，周知のように，『尚書正義』につき，吉川幸次郎博士を中心とする釈解訳注の作業があるが，『儀禮疏』についての作業は，これまで行なわれていない。

唐代に，賈公彦らによって撰述された『周禮疏』，『儀禮疏』は，五経正義中の『禮記正義』とともに，六朝における経注解釈の展開の諸相を窺わせて，経学史研究においても，礼自体の研究においても，不可欠の資料である。しかるに『儀禮疏』は，『儀禮』自身に固有される事物の捉え難さにもよって，疏のなかでも難解のものに属する。そこで，本研究班は，疏の本文につき，可能な限り厳密な解釈を求め，もって正確な訳文をほどこすことを当面の目標とした。そのため，阮元：校勘記をはじめとして，盧文弨：儀禮注疏詳校，金曰追：儀禮経注疏正譌，曹元弼：禮経校釈などの校勘類や，胡培翬：儀禮正義，張恵言：儀禮図などの清朝経学者の業績，および，倉石武四郎：儀禮疏攷正（自筆稿本）を常用の工具とし，さらに，聶崇義：三禮図，朱熹：儀禮経伝通解，浚延堪：禮経釈例，欽定儀禮義疏，池田末利訳注：儀禮，そのほか他数のものを参考にしつつ，毎月曜日，輪番制担当者の作成原稿につきさまざまな観点から検討を加え，訳解作業に従事した。

なお，班主任は，'49年度まで田仲が，50年度以降は蜂屋が担当している。

6　インド史における宗教と社会

教授　荒　松雄，山崎利男，研究委嘱　鈴木　斌，
田中敏雄，月輪時房，

本研究班は，昭和48年度から，一応，5年計画で組織されたもので，主要な研究対象としたのは，インド史上，社会と政治との関連で最も主要な役割を果してきたヒンドゥー教とイスラム教である。強調しておきたいのは，この研究は単に文献資料に拠るものではなく，研究担当各人の南アジア現地における調査研究の諸成果に基づくものである点である。この点については，荒・山崎・鈴木・田中は，東京外国語大学主催の「インド・パキスタンにおけるヒンドゥー・ムスリムの（宗教）生活に関する実態調査」と題する文部省科学研究費に拠る海外調査（1971・73年度に2回実施）に参加し，月輪も別の調査団（1975年度）に参加しており，それぞれ，その調査研究成果を利用している点を特に指摘しておきたい。

ヒンドゥー教とインド社会の問題については，山崎が，主として法関係の面，とりわけ家族法における法制定の過程と判例とを，とくに現地の下位裁判所の訴訟事件に基づいてヒンドゥー教との関連を論じた。田中は，ヒンドゥー民衆に強い影響力のあるサッティヤナーラーヤン信仰についてカターの諸資料から研究した（本研究所『紀要』66冊参照)。荒と鈴木は，現地のムスリム聖廟や宗教施設の現状調査と，文献・遺跡などの歴史資料，民間に流布する文献冊子類を考合して，デリー諸聖廟を主とし，ムルターン・ラホール，アジメール・グルバルガー・サルヒンドその他の地のイスラム教徒の指導者と民衆，宗教慣習などについての研究を行ってきた（『紀要』59，64，68，69冊を参照)。また月輪はインド中世の宗教建造物の構造上の問題について，ヒンドゥー・ムスリムの技術の交流の問題点を研究してきた（『紀要』66冊参照)。

7　西アジア農村の人文地理学的研究

教授　大野盛雄，助教授　田中紀彦，助手　後藤晃，
研究委嘱　加納康彦

われわれがとりあげる西アジア地域とは，イランを中央として，北はソ連のタージークスタン，ウズベクスタン，トルコメニスタン，アゼルバイジャン，東はアフガニスタン，パキスタン，西はトルコ，イラク，シリア，南はアラビア半島の諸国にまたがる広い領域で，一応国境をはずして考えられる文化的地域である。

この地域は，東洋と西洋の両者にはさまれた地理的位置から，多くの民族，人種，宗教，文化が錯綜し，世界史の流れの中に，文明，文化の上で重要な役割を果してきたが，その実態はかならずしも明らかにされているとはいえない。世界史発展のメカニズムを明らかにし，現在の国際問題を解明するためにも，この地域の社会，経済，文化の構造の実態を分析することは，きわめて重要な意義をもっている。

ところで，このような経済，社会，文化の諸条件の具体的なコンプレックス体は，まさに，「農村」という形であらわれており，その総合的分析，つまり人文地理学的方法による解明を出発点として，はじめて諸科学の分析へと展開するこ

とができよう。したがって，このような農村調査は，いわば考古学的な遺跡発掘に相当するものであり，歴史，社会学，経済学，宗教学等の諸分野に基礎的なデータを提供する役割を担っており，将来のアジア研究にとって大いに期待されることである。

以上のような考えに基づいて，われわれは，現地の具体的な「むら」を選び，これに住み込み，現地の言葉を話し，農民と生活を共にしつつ，農村の構造に関する生の資料を直接に収集することを目的とした。

このような目的をもって，この調査研究班は，3次（隔年）にわたって現地農村を調査する計画を立てた。その第1回では1970年6月から11月にかけてアフガニスタンに出張し，ヘラート周辺のタージーク系住民のむら，およびカーブル周辺のパシトゥン系住民のむら，計2カ所の集中的調査を行なった。第2回では1972年6月から73年1月にかけてイランに出張し，シーラーズ周辺のトルコ系住民のむら1カ所の集中的調査を行なうことを主に，アゼルバイジャン地方のむら2，3カ所の移動調査をも試みた。第3回では1974年6月から12月にかけてアフガニスタン，トルコ，イランに出張したが，前2カ国およびイラン国アゼルバイジャン地方では数カ所のむらの移動調査にとどめ，イラン国シーラーズ周辺の遊牧民定着のむら1カ所での定点調査に重点をおいた。3回にわたる現地調査の報告は，大野，勝藤（猛），田中，後藤らによって既に個々に行なわれたが，近く報告書をとりまとめ公刊の予定である。

C　科学研究費による研究

1　日本の社会と文化の総合的研究

——アジア諸地域との比較文化論的考察——

（一般A・昭和48年度）

代表者　窪　徳忠

本研究は，日本の文化と社会について，比較社会・文化論的な視点からとらえようとするものであり，東洋文化研究所所属の人文・社会科学の研究者が共同して，多角的かつ総合的な検討をおこない，研究の成果を発表することを目的とするもので，とりわけ，日本とアジア諸地域との比較検討に集点をおき，日本の文化と社会の構造を新しい視点から把握するようつとめた。

具体的には資料の蒐集に重点をおき，グルーピングリサーチとグループ相互間の合同研究の体制を組織した。資料の蒐集にあたっては以下の三グループにより，これを行なった。

1 中国・朝鮮の社会・文化関係資料。

2 東南アジアの社会・文化関係資料。

3 インド・西アジアの社会・文化関係資料。

2　アジア諸地域における社会と文化の総合的研究

——基層文化の形成とその変容——

（一般A・昭和50年度）

代表者　佐伯有一

本研究は，アジア諸地域の社会と文化について，それぞれの地域における基層文化の形成とその変容という課題に対し，当研究所の総力をあげて共同研究を推進し，わが国のアジア認識を根本的に深めようとするものである。特に各地域の伝統的宗教と政治・経済活動の関連性に留意しつつ，欧米の進出と対決するアジア社会・文化の近代化構造を多面的かつ総合的に追求し，新しいアジア像の構築

に資することを目的とするが，とくに資料の蒐集に重点をおき，以下の三地域に関するものをあつめた。

1 東アジアの社会・文化に関する図書・焼付写真等。

2 南及び東南アジアの社会・文化に関するマイクロフィルム・焼付写真等。

3 西アジアの社会・文化に関する図書・コピー等。

3　図録および焼付写真による中国絵画作品目録の制作

（一般C・昭和48年度）

代表者　戸田禎佑

所　内　鈴木　敬　　所　外　海老根聡郎

本研究は，中国絵画史研究に不可欠の図版・写真資料の目録を内外の図録・焼付写真等より制作し，より能率的な研究を行なうことが出来るよう基礎的研究素材の集積を行なおうとするもので，今回は8,000余点について複写を行ない，データ入りのカードおよびキャビネサイズカードは各々2,300余制作した。なお，この作業は51年度の特定研究「図録および焼付写真による中国絵画作品目録の制作」にひきつがれた。

4　鎌倉旧仏教の研究

――中国仏教との対比において――

（一般D・昭和46年度）

鎌田茂雄

鎌倉旧仏教の教学を解明し，とくに中国仏教学の華厳・法相・三論など諸教学と比較検討することによって，鎌倉旧仏教の思想史的特質を明らかにするもの。凝然の『法界義鏡』，良遍の『法相二巻抄』などについて，写本を東大寺，高山寺などに求め，撮影と整理をおこない，上記二書については，厳密な校訂をほどこし従来見られなかった定本を確定することができた。

5　インド中観思想史の研究

（一般D・昭和46年度）

江島恵教

インド中観思想史の解明にはまず関係文献（ほとんどチベット語訳）の解読が必要である。主要な文献については，現在残る諸版本を比較検討しなければならない。本研究は，その基礎的作業の上に立って，中観思想上の問題点を明らかにすることを当面の目的とし，中観思想史全体の記述を意図するもので，46年度は主にデルゲ版大蔵経中観部に収録された諸著作を逐一複写，整理，そのうち主要な著作，例えば般若灯論等に関しては，ナルタン版の複写をも準備した。また，北京版・デルゲ版・ナルタン版の間にあるテクストの異同を調査しながら，主要著作の解読作業を行い，後期中観思想を見る上で重要な『中観荘厳論』（チベット訳）等の解読・和訳の作業を進めた。その結果，バーヴァヴィヴェーカ（5世紀）からシャータラクシタ，カラマシーラ（8世紀）に至る思想的な系譜を大体把握することができた。

6　トゥルファン出土文書の基礎的研究

（一般D・昭和49，50年度）

池田　温

トゥルファン出土漢文文書は，6～8世紀を中心とする中国古代史および東西交渉史にとり貴重な根本資料であるが，その零細性と種類の多様性のため従来部分的にしか照明があてられていなかった。そこで竜谷大学図書館所蔵大谷探検隊将来文書の実査再検討を手がかりとし，中国の『文物』・『考古』等紹介の文書類をも対象として，多種類の資料を形式・内容両面から基礎的分類整理を加え，録文を作製して今後の研究への足がかりとする。

竜谷大学図書館への出張実査を通じ，特に唐代前半期の行政文書の分類整理にある程度のメドを得た。支配の基礎となる籍帳作製や貞定・戸等決定・給田・徴兵・収税・断獄等諸般にわたる文書行政の実態を理解するに有益な文書類（断片が多い）の録文を作製することができた。また，大谷文書とルコック文書の性格が類似する点を確認し，仏典等をも含めあわせ整理研究する必要を痛感した。

トゥルファン文書資料数百点の録文集を編年的に排列し，従来の録文を再検討して，多くの補訂を加えるを得た。ひきつづき近刊『新疆出土文物』所収文書等

の新資料を採録し，研究を進めている。

7　政治社会事象の予測におけるコンピュータ利用とその組織

（特定・昭和49，50年度）

代表者　関　寛治

所　内　松井　透

所　外　武者小路公秀，京極純一，三宅一郎，
田中靖政，池内　一，広瀬弘忠，田中良久，
安田三郎，直井　優，島内武彦，山本毅雄，
石田晴久，長谷部紀元，田中　一，
高畠通敏，坂本義和

政治社会事象の各種のレベルのデータを組織化し，その計量的分析を行い，かつシミュレーション・モデルを作成し，予測を行なうことは，実証的社会科学の発展にとって不可欠の前提条件である。しかし，日本ではこうした課題をなしうる研究者が，国際政治，政治学，社会学，社会心理学，心理学等の各個別分野にわずかずついるだけであり，いずれもかなり共通した課題を，個人的な努力によって達成しているが，体系的なデータの共用の面や汎用プログラムの開発の面で米国とくらべて約10年の遅れがある。この事態を今後1～2年のうちに改善しなければ，わが国の社会科学の発展に大きな禍根を残すことになる。

本研究の目的は，国際政治学，政治学，社会学，社会心理学の研究者が相互に協力して，次の課題をはたすことにある。

1　政治社会事象のコンピュータ利用による分析と予測にたずさわる研究者を組織化すること。

2　政治社会事象に関する各種のデータを計量的に分析するために必要とされるコンピュータ・プログラムの集大成。

3　政治社会事象に関するデータ・バンクを作成する方法論の研究および特定の分野に関するデータ・バンク作成の試み。

4　政治社会事象の予測のためのシミュレーション・モデルの作成に関する研究。

上述の研究の目的を達成するために，次の課題に研究を集中した。

1　研究者の組織については，上述の目的の達成のために，委員会を常設し，定期的な交流を行なう。（全員参加）

2　政治社会事象分析用のコンピュータ・プログラムの集大成と開発については，小委員会を設置し，文科系ユーザーがデータ・バンクと連結して手軽に使用できるデータ・バンク用プログラムパッケージの集大成を行なう。

3　政治社会事象に関するAggregate dataとSurvey dataのデータ・ファイル作成に関する小委員会を設置し，その一般的な方法論を確立する。

4　政治社会事象のシミュレーション・モデルを作成するための小委員会を設置し，その準備作業を行なう。

昭和49・50年度の研究成果は，代表者島内武彦「広域大量情報の高次処理」総合報告全6分冊（1975年3月20日発行）中に掲載された。

8　図録および焼付写真による中国絵画作品目録の作製

（特定・昭和51年度）

代表者　鈴木　敬

所　内　戸田禎佑，嶋田英誠

中国絵画図録は，戦前，戦後を通じ，その形式，収載される作品も多岐にわたり，時代・流派・作家研究等を行なうためには厖大な量の図録から研究素材を抽出しなければならず，最終的にはこれらを複写し，同一サイズの焼付写真を作成して比較研究を行なわなければならない。従ってそれに要する時間と経費は大きく，しばしば重複による冗費支出を伴う。本研究の目的は容易に研究素材を抽出し，研究作業をスムーズにするため，図録や焼付写真の作品を35 mmフィルム（白黒）で撮影し，キャビネ版引伸写真として同一規格化して，時代様式主題等の分類により収納し，種々の探査に便を計ろうとするものである。現在，すでに8,000枚の複写を完了しており，さらに51年度は15,000枚の複写作業を完了する予定である。

9　元代道釈画の研究

（総合A・昭和50年度）

代表者　鈴木　敬

所　内　鎌田茂雄　戸田禎佑，嶋田英誠

所　外　海老根聡郎，小林　忠，鈴木和夫

本研究班は長年にわたり「宋元仏画就中羅漢十王国の研究」と題した調査研究を行ない，数多くの業績を上げてきたが，その結果元代道釈人物画の多くの新資料が発見され，新たにこれらを体系づけて整理することが必要となった。そのためにより広く国内外の資料を集積し，将来の学問的作業の基礎を築きあげるよう作業が行なわれた。それを具体的に記せば以下の通り。

1　昭和50年7月に福井県若狭海岸の国清寺等五ヶ寺の収蔵品を調査，撮影し，数点に上る未発見資料を得た。

2　昭和50年9月，51年3月にのべ8日間の東博収蔵品調査，撮影を実施した。

3　京大人文研および東大東文研収蔵図録を中心として，約3,000枚の図版の複写整理を行なった。

4　本研究班は本年度，別に海外調査費用の交付により，米国，カナダ収蔵絵画遺品を調査撮影したが，これとは別に主として米国公私の収蔵家より1,500枚のフィルムを供与さえ，その整理を行なった。

D 個 人 研 究

川野重任（1972年4月まで）

主要研究課題

＊経済発展における人的投資——その経済機能——に関する研究

この問題の重要性は，物的援助を中心とした発展途上国援助政策が必ずしも所期の効果をあげ得ていないことの反省から，注意されるようになってきた。とくに農業の場合について然りである。本研究ではその理由の解明とともに援助政策としての教育協力の役割の究明に重点をおく。

主要業績

"Land Use Problems arising from High Economic Growth in Japan," Japan Center for Development Research ed., *The U.S.—Japan Conference on Regional Development*, January 1971

『農業発展の基礎条件』　東洋文化研究所，1972

『アジアの近代化』（編著）　東京大学出版会，1972

「官僚主義に支えられたインド混合経済」『国際問題』414号，1972年3月

窪　徳忠（1974年4月まで）

主要研究課題

＊道教の日本伝来

道教では，小さな村や字の守り神として土地神が，墓の守り神として后土神があると説く。それらは，土帝君，地の神，ヒジャイとして，沖縄県地方に伝来しているが，その分布や信仰の現状は明らかでない。それを明らかにすべく，目下調査中である。また，竈神もヒヌカンとして信仰されているので，それについても調査研究中。

＊道教，とくに全真教教理の研究

全真教という12世紀中葉に成立した道教教団の一派の経理は，いまだその全貌が明らかにされていない。さきに私はその一部を発表したが，仏教とくに禅宗との関係が深いので，目下禅宗と比較しながら研究中であり，まだ発表の段階には到っていない。なお道教史をまとめるべく努力中で，年内には脱稿の予定である。

主要業績

「沖縄における中国的信仰」　『人類科学』23，1971年3月

「谷中墓地内の三尸塔について」　『庚申』62，1971年5月

「沖縄地方の中国的習俗」　『日本歴史』277，1971年6月

「台湾の土地神信仰」　『宗教研究』207，1971年7月

「老子八十一化図説について——その資料を中心として——」　『東洋文化研究所紀要』58冊，1972年3月

「沖縄と中国文化——比較研究の必要性——」　『わが沖縄』（沖縄学の課題）5，1972年9月

「惜字紙の習俗と沖縄地方」　『南島史学』1，1972年10月

「道教と日本——后土神とヒジャイ——」　『鈴木博士古稀記念　東洋学論叢』1972年10月

「台湾の城隍神信仰」　『東方学会創立二十五周年記念　東方学論集』1972年12月

「中国の風俗と沖縄地方」　『青い海』1973年1月

"On Taoistic Belief in Okinawa," *Japanese Religions*, 7－4，1972

「沖縄の民俗宗教と中国」　『沖縄の民族学的研究』1973年3月

「中国の信仰習俗と日本——石敢当を例として——」　『史学論集 対外関係と政治文化』1974年2月

荒　松雄

主要研究課題

＊南アジア史におけるスーフィー聖者の墓廟に関する研究

13世紀以降今日に至る南アジアにおけるイスラムの浸透については，スーフィーの著名聖者のダルガー（聖廟）の果してきた役割は大きい。十数年来行なってきたムスリム建造物の調査研究と，1971・1973年の現地調査の成果に基く歴史学的な研究であるが，1976年度に特別紀要『インド史におけるスーフィー聖廟』（仮題）として，デリー地域に関する成果の一端を公刊する予定である。

＊南アジア史における民族・宗教と国家権力に関する研究

南アジア社会における多様性の主要な要因に民族・宗教の問題があるが，古代・中世における複雑な民族・宗教の問題は，歴史的な視点からは必ずしも正当に採りあげられていない。宗教と社会に関するアーリヤと非アーリヤ系諸民族の関係，西・西北方から移住・侵入してきた諸民族が中世の国家構成と社会関係に及ぼした影響，およびヒンドゥー・イスラム両教と国家支配との関連等の諸問題を歴史の流れの中で考察するものである。

主要業績

『三人のインド人——ガンディー・ネール・アンベドカル』　白樹社，1972年

「19世紀のインドにおける改革運動」　岩波講座『世界歴史』21，1972年8月

「インドにおける歴史意識」　岩波講座『世界歴史』30，1972年11月

「ヒンドゥイズムの諸問題」　『インド文化』10号，1972年12月

「スーフィー聖廟と建造物と造営——デリーのシェイフ＝ナスィールッディーン廟の場合——」　『東洋文化研究所紀要』64冊，1974年3月

「デリーに現存するスーフィー聖者の偽廟と偽墓」　『東洋文化研究所紀要』

69冊，1976年3月

「ルガン宮延の女性像」　『インド女性史』評論社，1976年4月

鈴木　敬

主要研究課題

＊中国絵画の様式研究

北宗山水画の様式変遷を中心に研究を進め，別記のような著書，論文等を発表してきたが，現在は，六朝時代にはじまり唐時代に形式的完成を見た"青緑山水画風"につき，その成立過程および，それが北宗，南宗山水画様式の展開に及ぼした影響等につき研究を進めている。

主要業績

「元代李・郭派山水画風についての二，三の考察」　『東洋文化研究所紀要』41冊，1966年

「瀟湘卧遊図巻について（上）」　『東洋文化研究所紀要』59冊，1968年

『明代絵画史研究——浙派——』　東洋文化研究所，1968年

『中国文化叢書（芸術）』（編著）　大修館，1971年

『中国美術（Ⅰ，Ⅱ）』　講談社，1973年

『李唐，馬遠，夏珪』　講談社，1974年

佐伯有一

主要研究課題

中国近代における変革の構造的研究を目指し，その前提となる旧中国とくに明清時代の権力支配の構造的展開を裁判制度を通じて明らかにし，他方，中国における資本主義の発展について，主として，金融資本の形成とその展開に注目して考究を進め，民族闘争史の構造的発展に資しようとしている。

主要業績

『近代中国』　講談社，1975年2月

『仁井田博士輯　北京工商ギルド資料集』1・2（田中一成と共編著）
東洋文化研究所付属東洋学文献センター叢刊第23•25輯，1975年3月，1976年3月
『同上　2』（共編注）　同上，1976年3月

大野盛雄

主要研究課題

＊西アジア農村の構造の研究

フィールドワークによる資料の収集にもとづき，農村を，とくに社会経済構造に重点をおいて明らかにする作業を，これまで13年間にわたりイラン，アフガニスタンを対象として行なってきた。これをさらに発展させるために，調査農村を"社会変化"という視点から再検討するとともに，地域的にはトルコをも含めてフィールドワークを実施する計画である。

主要業績

『アフガニスタンの農村から――比較文化の視点と方法――』　岩波書店，1971年8月
「風土と文化」　東京大学公開講座『人間と環境』東京大学出版会，1971年
『フィールドワークの思想――砂漠の人間像を求めて――』東京大学出版会，1974年6月

中根千枝

主要研究課題

＊インド，中国，日本，東南アジア諸社会の集団構造の比較研究

家族ならびに村落レベルにおける集団の構造的特色と，それが国家レベルの行政組織ならびにその中枢に位置するエリート層の構成とどのような関係になっているかを，歴史的背景をふまえて解明することを目的とした研究。

主要業績

「チベット農民の実態について」　『山本博士還暦記念東洋史論叢』，山川出版，1972年3月

『適応の条件』　（現代新書），講談社，1972年11月

"Social Background of Japanese in Southeast Asia," *The Developing Economies*, June 1972.

"An Interpretation of the Size and Structure of the Household in Japan over Three Conturies," Peter Laslett ed. *Household and Family in Past Time; Comparative Stvdies in the Size and Structure of the Domestic Group over Time.* Cambridge Univ. Press, 1972.

Review: *The Konyak Nagas; An Indian Frontier Tribe*, by Christoph von Furer-Haimendorf. *American Anthropologist* 74, December 1972.

A CA Book Review: *Japanese Society*, by Chie Nakane. *Current Anthropology* 13－5, December 1972

「文化による親子関係の相違」　東京大学公開講座『親と子』，東京大学出版会，1973年4月

「沖縄・本土・中国・韓国の同族・門中の比較」『沖縄の民族学研究』日本民族学会，1973年5月

『韓国農村の家族と祭儀』（編）　東大出版会，1973年11月

"Cultural Anthropology in Japan" *Annual Review of Anthropology* 3, October 1974.

"Fieldwork in India－A Japanese, Experience," A. Beteille and T.N. Madan eds. *Encounter and Experience: Personal Accounts of Fieldwork.* Vikas Publishing House, January 1975

「歴史学と社会人類学」『歴史と地理』世界史の研究82, 山川出版社 1975年2月

「社会人類学と東アジア」　『民族学研究』39巻4号，1975年3月

深井晋司

主要研究課題

＊ササン王朝摩崖浮彫の研究

イラン高原西南部と西北部にわたって散在するササン王朝時代ペルシアの帝王達の栄光とその偉業を表わすために遺された摩崖浮彫を一括して現地調査を行ない，その研究を達成せんとするものである。ケルマンシャー地方のターク・イ・ブスターンを始めとして，ビシャープール地区に遺る30数点の作品の個々の特色を把え，併せてその様式・年代を明らかにし，その東西文化交流史の研究の一助とするものである。

主要業績

『デーラマンⅣ』（共著）　イラク・イラン遺跡調査団報告書12，1971年7月

『ターク・イ・ブスターンⅡ』（共著）　イラク・イラン遺跡調査団報告書13，1972年2月

「デーラマン地方出土のコア・グラス」　『東洋文化研究所紀要』56冊，1972年3月

"A Fragment of a Sassanian Cut Glass Bowl Recently Found at Kyoto," *The Memorial Volume of the Vth International Congress of Iranian Art & Archaeology*, 1968, Ministry of Culture and Arts, Teheran, Iran, 1972

『マルヴ・ダシュトⅢ』（共著）　イラク・イラン遺跡調査団報告書14，1973年3月

『ペルシアのガラス』（共著）　淡交社，1973年3月

「ササン王朝ペルシア銀製馬像に見られる馬印について」　『東洋文化研究所紀要』62冊，1974年2月

"The Brand Found on the Persian Silver Horse Statue of the Sassanian Period," *Orient*, Vol. X, 1974

"Note on Bronze Figurines of the Parthian Period" *A Survey of Persian Art* (Oxford University Press) Vol. XV, 1974

『テル・テラサートⅢ』（共著） イラク・イラン遺跡調査団報告書15, 1975年3月

「アゼルバイジャン出土馬勒装飾金具に関する一考察」 『三笠宮殿下還暦記念オリエント学論集』, 講談社, 1975年12月

尾上兼英

主要研究課題

＊話本の展開

テキストに定着する際に，話本は文人の手が加えられた形跡があるが，なお，語り物の形式と内容を保存している。いっぽう，その後の模倣作・擬話本は，作者および享受層の変化と対応して，内容に明らかな変化が認められる。小市民の娯楽から，地主文人の消閒へと変質していく。話本から擬話本への展開過程を，作品の側からと編者・作者および享受者の側から分析し解明することを当面の目標としている。

＊1930年代文学運動の一側面としての民間文芸形式発掘

1930年代文学運動には，二つの側面が考えられる。一つは伝統的な「小説」と絶縁した所から出発した「五四」以来の新文学であり，形式はヨーロッパ近代文学，内容は急進的小ブルジョワである。別の面として左連が事業の一つとしてかかげた民間文芸形式の発掘であり，旧来の説唱文芸の形式に革命的啓蒙主義をもりこもうとした文芸である。その結節点に毛沢東のいわゆる「文芸講話」があり，成功作として趙樹理の『李有才板話』以下の人民文学がおかれる，という前提で1930年代文学を解明したい。現段階は1930年代文芸雑誌の調査・整理から着手している。

＊説唱文芸の調査

享受層の変化によって，「語り物」が「小説」（擬話本）へと移行した明

末から清代にかけて，民衆文芸は「曲芸」（説唱文芸）としてうけつがれ，今日に及んでいる。本来は山東快書，揚州評話，評弾（揚州），相声（北京），上海滑稽，上京琴書等それぞれの土地で調査することが望ましいが，現在はまだ実現できない状態なので，東南アジア各地の華僑街に残存する「講故事」の実態調査に着手した。これらの地域は，主として華南出身者によって占められているため一部に偏する難がある。また，それぞれの地方の固有の音楽と方言の特色の上に成立するので，各分野の専門家の協力が必要であることを痛感している。

主要業績

『1930年中国文芸雑誌』（一）・総目録・編著者名索引　東京大学東洋文化研究所付属東洋学文献センター叢刊　第14輯，1971年11月

「明代白話小説ノート（1）」　『東洋文化研究所紀要』44冊，1967年11月

「魯迅の『個人主義』と『人道主義』」　『魯迅と現代』，勁草書房，1968年7月

「庶民文化の誕生」　岩波講座『世界歴史』Ⅱ－3，1970年2月

「五代・宋・金・小説」「明・小説」「清・小説」　前野直彬編『中国文学史』，東京大学出版会，1976年6月

関　寛治

主要研究課題

＊　平和理論の体系化

＊　第三世界の国際関係論

＊　計量地球政治学の基礎的諸問題の解明

主要業績

"The Course of Peace Research in Japan: A Survey" (with Tadasu Kawata and others), mimeo, 1973

"Which Way in Southeast Asia?" *Japan Quarterly*, No.4, 1973

"Nuclear Proliferation and Our Option," *Japan Quarterly*, No. 3, 1974

「国際システム論における行動計量学の課題」 『行動計量学』1巻1号, 1974年3月

"The Building of Peace," *Japan Echo*, Vol. Ⅱ, No. 1, 1975

"Nation-Building in Southeast Asia: Malaysia's New Economic and the Search for Social Justice," *The Wheel Extended, Special Issue: Cooperation with the Developing Countries*, Summer 1975

"The Metastasis of the Nuclear Deterrence," *Peace Research in Japan*, 1974, 1975

「アジア地域の相互依存モデル」 『日中アジア地域協力の展望』日中経済協会, 1975

『平和の探求』(岡倉古志郎, 丸山益輝と共編) 時事通信社, 1975

"Japanese Foreign Policy under the Oil Crisis (Symposium on Peace Research in Asia)," *Japanese National Commission for Unesco*, 1976

"Forecasting in Cross-National Perspective —— Japan" (with Yoshikazu Sakamoto), N. Choucri ed. *Forecasting in International Relations*, MIT Press, 1976

"Détente Politics and the Korean Peninsula," 17th Convention, International Studies Association, 1976

「インドシナ後のアジアと日本」 『一九七五年中国をめぐる国際関係』, 日中経済協会, 1976年

「軍備管理に代わる真の核軍縮——分析と提案をつなぐ理論——」 『核廃絶か破滅か』飯島宗一他編, 時事通信社, 1976

「ミッション志向科学としての平和研究——医学との比較を手がかりとして——」 『国際政治』No.54, 「平和研究——その方法と課題——」, 1976年

「平和研究方法論シンポジウムにおける論点の諸形態——その内的連関につ

いて」（中村研一と共著）　『平和研究』創刊号，1976年

「シミュレーション・データの情報検索とモデル建設のためのシステムの構築」（中村研一と共著）　『広域大量情報の高次処理――巨大情報システムの基礎研究』第3年次報告，1976年

山崎利男

主要研究課題

＊4－12世紀銅板文書の研究

＊イギリス植民地支配下の司法制度研究

＊ヒンドゥー法史研究

主要業績

「12世紀ベンガルのセーナ朝銅板文書について」　『山本博士還暦記念　東洋史論叢』，山川出版社，1972年10月

「婚姻思想の展開，インド」　『講座　家族・3』弘文堂　1973

「ラームモーハン＝ローイの司法制度論（1）・（2）」『東洋文化研究所紀要』64，67冊，1974年3月，1975年3月

「インドの婚姻訴訟事件について（上）・（下）」　『ケース研究』144，147号，1974年11月，1975年2月

「金石文・インド」　江上波夫監修『考古学ゼミナール』山川出版社，1976年3月

「インド法制史研究の課題――19世紀インドの法と裁判――」　『社会科学の方法』81号，1976年3月

「インドの婚姻と離婚の法――『1955年ヒンドゥー婚姻法』を中心として――」　『家族　政策と法』5巻，東京大学出版会，1976年6月

松井　透

主要研究課題

＊北インド農産物価格史

19世紀後半から20世紀にかけての，北インド，ウータル・プラデシの農業史の研究を，当面はとくに農産物価格変動の史的研究に中心をおいて，推進しつつある。将来はウタル・プラデシにかぎらず，英領インド全域に手をひろげる予定であるが，史料が量的に厖大であるために，簡単に処理することはできない。近現代史に特徴的な大量な史料の取扱い，その史料批判について，十分な法的用意を整えつつ，植民地支配下の農業の発展や農村生活の変動について検討を進める。

＊植民地支配の思想史的背景

コロニアリズム・ナショナリズムをめぐるヨーロッパ側の思想史動向の，19世紀を中心とした考察。とくに自由主義から帝国主義へかけての近代文明論的論理のイデオロギー的考察。当面は２，３の人物に的をしぼって，史料を収集しつつある。

主要業績

「インド村落社会についての一考——『共同体論』とカースト制度——」　アジア経済研究所資料，調研，1971年9月

『インド土地制度研究』（編著）　東大出版会，1972年1月

「初期のベンガル統治とウィリアム＝ボルツ」　上掲書，1972年1月

「19世紀末ミーラトにおける土地所有と地主小作関係」　同上，1972年1月

「植民地支配期のインド農業——メーラト県の場合——」　山田秀雄編『植民地経済史の諸問題』アジア経済研究所，1973年3月

『アジア的生産様式論をめぐって　Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ』（共著）　『アジア経済』14巻5，6，8号，1973年5，6，8月

"South Asian Studies in Japan,"　*South Asian Review*. Vol. Ⅶ, No. 2, January 1974

「19・20世紀北インドの農産物価格について——統計資料の考察とメーラト県の具体的研究——」　『東洋文化研究所紀要』64冊，1974年3月

「インドにおける植民地支配と『富の流出』」　『世界史のしおり』74－3，1974年11月

"N3 YUEHNE BЯЛ OHNN HOBON N HOBENШEN NCTOPNN NHД-NN," *HAROД bl A3NN N AΦPNKN*, 2, 1975

「タミル語刻文に現われる人名の統計的研究（中間報告3）」　『アジア・アフリカ語の計数研究』3，1976年3月

鎌田茂雄

主要研究課題

＊中国仏教儀礼の研究

昭和45年以来，香港および台湾における中国仏像の宗教儀礼に関する調査および韓国仏教の儀礼の研究を継続してきたので，その実態調査をふまえて，中国仏教の儀礼の成立と展開を明らかにするのが目下の研究課題の一つである。そのため大日本続蔵経の「礼懺部」の研究と，宋代以後の仏教関係諸文献にあらわれた儀礼に関する資料を蒐集することに努めている。

＊朝鮮華厳思想史の研究

日本の古代・中世の華厳教学を理解するためには，どうしても新羅の華厳教学と高麗の華厳教学に通暁していなければならない。そこで私は目下のところ「華厳五教章円通記」などの解読につとめるとともに，新羅華厳の義湘・明晶・見登・表員などの著作の研究をふまえたうえで，日本華厳思想史の解明を将来の課題としている。

主要業績

『鎌倉旧仏教』（共著）　岩波書店，1971年11月

『禅源諸詮集都序』　筑摩書房，1971年12月

「万暦四年刊『禅源諸詮集都序』について」　『東洋文化研究所紀要』58冊，

1972年3月

「台湾の仏教儀礼（Ⅰ）」　『印度学仏教学研究』20巻2号，1972年3月

「大仙寺の朝――台湾仏教の一断面――」　『花さまざま』，1972年5月

「禅思想の形式と展開」　『禅研究所紀要』2号，1972年8月

「円覚経惟慤疏について」　『仏教思想論叢』　1972年11月

「台湾の仏教儀礼（2）――華厳七仏儀について――」　『印度学仏教学研究』21巻1号，1972年12月

『原人論』　明徳出版社，1973年11月

「日本華厳における正統と異端」　『思想』593号，1973年11月

「台湾の仏教儀礼――念仏法会について――」　『インド思想と仏教』1973年11月

「香港の仏教儀礼――大悲懺法について――」　『印度学仏教学研究』22巻1号，1973年12月

「東大寺華厳学の特質――華厳宗要義をめぐって――」　『南都仏教』31号，1973年12月

「朗遊教学におよぼした宗密の影響」　『禅文化研究所紀要』6号，1974年3月

「法界縁起と存在論」　『講座　仏教思想』1巻，1974年4月

「中国仏教圏の形成――その歴史と現状――」　『東洋学術研究』14巻3号，1975年5月

『宗密教学の思想史的研究』　東京大学出版会，1975年5月

「海印寺の朝――韓国仏教の一断面――」　『禅思想とその背景』1975年7月

「韓国の宗教事情について――韓国仏教の歴史と現状――」　『宗務時報』35号，1975年9月

「圭峯宗密の法界観」　『仏教における法の研究』1975年10月

「華厳教学における止観」　『止観の研究』1975年11月

「圭峯宗密の教判論」　『仏教研究論集』1975年12月

「明恵」　『日本宗教史の謎』1976年2月

池田　温

主要研究課題

＊律令制の比較史的研究

隋唐朝で完成される中国古代帝国の国制を体系的に理解するため，律令制を対象として多面的考察を加える。具体的方法としては，（1）律疏・令・勅格・式本文の整理と訳解，（2）法及び制度の形式・変質過程の史的追跡，（3）法の適用事例の個別的検討を通ずる制度の機能分析，を採用し，伝存文献を批判的に活用するため，特に敦煌・吐魯番出土文書等一次史料の精査を推進する。あわせて高句麗・百済・新羅・日本等の古代国制への影響をたどり，相互比較を試み東アジア古代史の把握を深める。

主要業績

「裴世清と高表仁――隋唐と倭の交渉の一面――」　『日本歴史』280号，1971年9月

「西安南郊何家村発見の唐代埋蔵文化財（訳）『史学雑誌』81巻9号，1972年9月

「丑年十二月僧龍蔵牒」　『山本博士還暦記念東洋史論叢』1972年10月

『大唐開元礼　附大唐郊祀録』（編）　汲古書院，1972年11月

「中国古代の租佃契（上）（中）」　『東洋文化研究所紀要』60，65冊，1973年3月，1975年2月

"T'ang Household Registers and Related Documents,"　*Perspectives on T'ang* 1973

「トーマス・ティロ　唐史における帝王符瑞の一例とその背景（訳）」『東方学』48号，1974年7月

「開運二年十二月河西節度都押衙王文通牒」　『鈴木俊先生古稀記念東洋史

論叢』1975年4月

「沙州図経略考」　『榎博士還暦記念東洋史論叢』1975年11月

「敦煌遺文」　『書の日本史』1巻，1975年

「六朝・隋唐」　『日本における歴史学の発達と現状　Ⅳ」1976年3月

山田三郎

主要研究課題

アジア開発途上諸国の経済社会発展において農業は重要な役割を占めている。“緑の革命”の進行は，農業発展の希望的側面を示すとともに，種々の問題の存在をも同時に提示した。そこで，改めて各国のこれまでの農業の発展過程を農村開発あるいは経済開発との関連において分析し，各国農業の発展要因と制約要因を追求するとともに，今後のアジア諸国農業に課せられた諸課題を達成するための条件や戦略の検討をアジア諸国全体にわたって行なう。

主要業績

「経済成長と農山村過疎問題——過疎化のプロセスと過疎地域の類型——」『産業構造の変革と地域社会の変貌——農業・農村問題を中心として——』，京都大学人文科学研究所，1972年6月

「アジアの農業開発計画——タイの事例——」　川野重任編『アジアの近代化』，東京大学出版会，1972年8月

「タイ農業多角化の課題」　石川滋編『農業の技術革新と制度的変革』，アジア経済研究所（研究参考資料211），1973年3月

『未開発地域農林資源開発調査報告書——タイ・アルゼンチン・ケニヤにおける飼料穀物（メイズ・ソルガム）の開発可能性について——』（逸見謙三外5名と共著）　国際開発センター，1973年3月

「タイの就業構造と労働生産性の変化，1960～1969年」　『アジア政経学会，1973年4月

「発展途上国の農業と国際協力の在り方——ケニヤのケース——」　『発展途上国への農業協力』（農業開発研究会No.1，所内資料），アジア経済研究所，1973年4月

「農業土地資本の投資効果——大規模投資の地域類型別比較——」　篠原泰三編『農業土地資本の研究』，東京大学出版会，1973年6月

「工業化と産業構造——農業の役割——」　篠原三代平，馬場正雄編『現代産業論1　産業構造』，日本経済新聞社，1973年6月

「産業構造の変化——農業——」　江見康一，塩野谷祐一編『日本経済論——経済成長100年の分析』，有斐閣，1973年8月

「タイの労働生産性と雇用」　宍戸寿雄編『タイ経済発展の諸条件』アジア経済調査研究双書212，アジア経済研究所，1973年8月

「イギリスにおけるグリーンベルト」　『海外視察報告イギリス』日本地域開発センター，1973年10月

「アジア農業の生産性と生産構造——マクロ計量的国際比較——」　『東洋文化研究所紀要』63冊，1974年3月

「米の需給関係の分析と政策：マレイシア」（倉本慶市，山川征和と共著）『経済開発基礎調査——東南アジアの米に関する政策的研究——』国際開発センター，1974年3月

「米の需給関係の分析と政策：タイ」（倉本慶市，山下幸子と共著）　同上書，1974年3月

「米の需給関係の分析と政策：インドネシア」（田村紀之，山川征和と共著）同上書，1974年3月

「農業」　川口弘，篠原三代平編『図説　日本経済論——戦後の経済発展のすがた——』，有斐閣，1974年7月

「主要穀物輸出国——アルゼンチン」　『世界の穀物需給構造——1950～1970年——』，国際食糧農業協会，1975年2月

「アジアの一次産品・加工品の生産・輸出と輸出価格の動向」　逸見謙三編

『アジアの工業化と一次産品加工』，アジア経済研究双書 225，アジア経済研究所，1975年3月

「錫生産の動向と問題点——マレーシアを中心に——」　同上書，1975年3月

「日本への留学生と日本語」　川野重任編『東南アジア留学生の日本選択』（東南アジア教育研究会所内資料No. 3），1975年5月

『食料経済』（農林省農業者大学校通信講座——経済Ⅴ——）　全国農業改良普及協会，1975年5月

「アジア諸国の農業特性と農業地域類型——主成分分析による農業特性の類型化——」　日本農業経済学会『農業経済研究』47巻1号，岩波書店，1975年6月

「アジア農業の投入産出構造と発展のパターン——国際比較による各国農業の位置づけ——」（Ⅰ）　『アジア経済』16巻6号，アジア経済研究所，1975年6月

「同上」（Ⅱ）『同上』16巻7号，1975年7月

「同上」（Ⅲ）『同上』16巻8号，1975年8月

A Century of Agricultural Development in Japan, Its Relevance to Asian Development (with Yujiro Hayami, Masakatsu Akino and Masahiko Shintani), University of Minnesota Press and University of Tokyo Press, July 1975

"Agricultural Research Organization in Economic Development: A Review of the Japanese Experience" (with Yujiro Hayami), Lloyd Reynolds ed., *Agriculture in Development Theory*, Yale University Press, 1975

「農業生産性の国際格差とその変化」　加藤譲編『現代日本農業の新展開』，お茶の水書房，1976年3月

"Agricultural Growth in Japan, 1880－1970" (with Yujiro Hayami), H. M. Southworth, V.W. Ruttan and Y. Hayami eds., *Agricultural Growth in Japan, Taiwan, Korea, and the Philippines*, University Press of

Hawaii, 1976

A Comparative Analysis of Asian Agricultural Productivities and Growth Patterns, Asian Productivity Organization, 1975

"International Comparisons of Productivity in Agriculture" (with Vernon W. Ruttan), *Recent Developments in Productivity Measurement*, National Bureau of Economic Research, 1976

高橋　彰（1972年8月まで）

主要研究課題

＊フィリピン農村の構造変化

1960年代後半から技術的制度的側面において，大きな変化要因のインパクトを受けつつあるフィリピン農村において，その経済と社会，とくに，土地関係，労働力構造，階層関係がいかなる変貌を示し，農民の生活と思考のパターンがいかなる方向に動きつつあるかを，北ルソン，中部ルソンでのインテンシブなフィールドワークによって分析している。

＊アジアにおける土地改革の新動向

1970年代に入って，国内の農業不安の激化と，国際的農産物市場の変動を背景として，アジア諸国においては土地政策に新たな方向が求められつつある。その動向を，フィリピン・タイ・マレーシア・パキスタン・インド等，東南アジア，南アジアの事例研究を基礎として比較検討している。

主要業績

『東南アジアの価値体系　Ⅳ』（萩原宣之と共著）　現代アジア出版会，1972年3月

"Peasantization of Kasama Tenants," *Philippine Sociological Review*, XX－1, 2, 1972

松丸道雄

主要研究課題

＊出土文字史料による殷周史研究

甲骨文・青銅器銘文を主たる史料とし，考古資料及び文献を加えて，殷周時代の国家・社会の構造を解明し，中国における国家形成を実証的に追求することを目標とする。そのためには，甲骨文・金文の史料的性格を確定することが先決であるため，目下，金文の弁偽を中心に，殷周青銅器の史料的検討を目的として，研究を行なっている。

主要業績

「雷台東漢墓出土の成組銅車馬」　『日中文化交流』179号，1974年4月

「1971年歴史学会回顧と展望・殷周」　『史学雑誌』81巻5号，1972年5月

"Oracle Bones," *Essays on the Sources for Chinese History*, Australian National University Press, 1973

「甲骨文の実例を通して見た殷代の社会」　『世界のしおり』74巻1号，1974年3月

「漢字の字形の歴史的変遷」　『いんてる』6号，1974年9月

『新編　金石学録』（編）　汲古書院，1976年6月

「日本散見甲骨文字蒐集（五）」『甲骨学』11号，1976年6月

「西周金文の弁偽をめぐって」　『甲骨学』11号，1976年6月

田仲一成

主要研究課題

＊明清地方劇の社会構造

宋元時代より明清時代に至る中国の演劇，戯曲の歴史的展開の過程を，それぞれの時代の社会，経済などの社会構造，社会背景との関連において，綜合的に把握する。とくに，明代中期における大地主制確立を境にして，それ

以前の村落共同体的な演劇が大地主の支配する宗族演劇と，小農民，小商人が掌握する市場地演劇とに上下両極分解を遂げていく過程を検討し，併せて明末清初間の村落演劇をめぐる，地主側の反動的再編成政策と，それに対抗する貧下層農民側の抗争の状況を考察する。

＊中国演劇の発生

古代の祭祀儀礼の中から，演劇的なものが分離独立してくる過程，並びに中世の鎮魂儀礼から悲劇が自立してくる過程について分析し，全体として，中国における劇文学発生の仕組を理論的に構成する。資料としては古代儀礼文献のほか，近世の地方民俗資料，地方劇資料を活用し，問題への接近に努める。

主要業績

『清代地方劇資料集』（一）（二）　東京大学東洋文化研究所東洋学文献センター叢刊，第2・3輯，1968年3月，12月

『仁井田陞博士輯北京工商ギルド資料集』（一）（二）〔佐伯有一と共編〕　同上，第23・25輯，1975年3月，1976年3月

「南宋時代の福建地方劇について」　『日本中国学会報』22集，1970年10月

"Development of Chinese Local Plays in the 17th and 18th Centuries," *Acta Asiatica*, 23, September 1972

「十五・六世紀を中心とする江南地方劇の変質について」（一）（二）（三）『東洋文化研究所紀要』60，63，64冊，1973年3月，1974年3月，1975年3月

中村 廣治郎

主要研究課題

＊ガザーリー研究

これまでの研究がとかく神秘思想家としてのガザーリーの個人史的研究に片寄りがちであった。この点を批判的に反省し，彼の宗教思想を宗教思想と

してとらえつつも，それを特にその時代的社会的背景との関連の中で明らかにし，その展開過程を跡づける。

＊イスラム宗教史の研究

従来イスラム史といえば，イスラム政治・社会史であるか，あるいはイスラム思想史であると解され，しかも後者の場合，イスラム神学史，哲学史，法学史，神秘思想史のことと考えられがちであった。これに対して，宗教としてのイスラムの特質をふまえ，それら各分野を有機的に綜合する形でイスラム宗教の史的展開を実証的に理解する方法論の確立を目指す。

主要業績

「ガザーリーの神秘修行論 —— Dhikr と Du'ā' を中心として ——」 『東洋文化研究所紀要』53冊，1971年3月

「イスラムの宗教と信仰集団」 『アジアの宗教』アジア経済研究所調査研究部，1971年3月

"A Structural Analysis of *Dhikr* and *Nembutsu*," *Orient*, Vol. Ⅶ, 1971

「イスラム化とスーフィズム」 『「イスラム化」にかんする共同研究報告』5，1972年3月

「ガザーリーの神秘修行論（承前）—— Dhikr と Du'ā' を中心として ——」『東洋文化研究所紀要』57冊，1972年3月

Ghazali on prayer 東洋文化研究所，1973年3月

W. C. スミス『現代におけるイスラム』（翻訳） 紀伊国屋書店，1974年1月

「コーランの被造性をめぐる論争について」 『東洋文化』No. 54，1974年3月

「Tawḥīd の実践的意味について」 『宗教研究』218号，1974年3月

「イスラムと政治 —— イスラム世界の志向するもの ——」 『アジア・クォータリー』6巻3号，1974年7/9月

"Ibn Maḍā's Criticism of Arabic Grammarians," *Orient*, Vol. X, 1974

「イスラムにおける聖と俗」 『宗教研究』48巻222号，1975年3月

「ガザーリー研究とその問題点（1）—— 中世より19世紀末までを中心として——」　『東洋文化研究所紀要』67冊，1975年3月

「ガザーリー研究とその問題点（2）—— 回心・引退の問題を中心として——」『東洋文化研究所紀要』69冊，1975年3月

「宗教史における『起源』の問題」　『宗教研究』226号，1976年3月

「イスラムの信仰とシャリーア」　日本サウディアラビア協会編『アラビア研究論叢 —— 民族と文化』，1976年4月

戸田禎佑

主要研究課題

＊元代人物画研究

元時代の絵画のうち人物画に関しては，日本国内に未検討の資料が数多く遺されている。その多くは民間画工の制作した道釈人物画であるが，これを用いて，従来，不明な点の多かった元時代の絵画史に新たな視野を拓くことを期している。

＊牧谿研究

南宋末の禅僧画家・牧谿の画風の成立について，それを江南系絵画の伝統にたつものとしてとらえようとするもの。五代・北宋以来の江南系絵画の変化を純粋に様式的観点から再検討し，そのうえで，従来禅宗的な要因などに比重をおきすぎた観のある牧谿評価から離れた牧谿芸術の本質に関する再考察を行なう。

主要業績

「中国絵画展」カタログ編集　根津美術館，1971年3月

「北宋初期の江南山水画」・「北宋時代の花鳥画」・「宋元禅僧画家の絵画」・「元代道釈画の諸問題」　『中国文化叢書・芸術』，大修館，1971年8月

『将来美術・原色日本の美術』（米沢嘉圃と共編）　小学館，1971年9月

『渡来絵画・日本絵画館』（川上涇と共編）　講談社，1971年10月

「鹿王院釈迦三尊図について」　『美術研究』276号，1971年10月

「中国絵画における形態の伝承」　『東洋文化研究所紀要』57冊，1972年3月

「白衣観音図」　『国華』946号，1972年6月

『水墨画』(Ⅲ)　毎日新聞社，1973年2月

『牧谿・玉澗』　講談社，1973年5月

「元代道釈画に関する諸問題」　『ミューゼアム』287号，1975年2月

『梁楷・因陀羅』　講談社，1975年2月

松谷敏雄

主要研究課題

＊西アジアにおける農耕文化発生の研究

人類の歴史のなかで最大の発明のひとつである食料生産経済が，西アジアのメソポタミア周辺で最初に試みられたことは，近年の考古学的発掘資料により確実に推測できる。何故にこの地方において当時このような大変革がなされたかはまだ未解決である。この問題に関して，自らの手でも発掘調査を行ない，解明に努めている。

＊紀元前第七千年紀から四千年紀にいたる北メソポタミアの相対年代学の研究

前研究課題を遂行していくのに避けられないのが本課題といえよう。C–14をはじめとする放射性元素による「絶対年代」の測定には，さまざまな疑問がのこされている。考古学の基本的方法である層位学と型式学により，北メソポタミアの相対編年を確立させたい。

主要業績

「いわゆる＜総合人類学の失敗＞について」　『石田英一郎全集』5巻，筑摩書房，1970年10月

「ピゼとチネ――泥壁考序説」　『東洋文化研究所紀要』58冊，1972年3月

『マルヴ・ダシュトⅢ』（共著）　東洋文化研究所，1973年3月

「西アジアの特異な石器＜サイド・ブロウ・ブレイド・フレイク＞について」『東洋文化』54号，1974年3月3

『テル・サラサートⅢ』（共著）　東洋文化研究所，1975年3月

「メソポタミア文明の崩壊」　『にんげん百科』101，1975年8月

「北メソポタミア最初の紡錘車の形態」　『江上波夫教授古稀記念論集』1巻，山川出版社，1976年11月

田中紀彦

主要研究課題

＊農業の地域構造

地域論的視角から農業の地域構造について実証的に研究する。具体的には商業的農業の発展にともなう各種農産物の主産地の形成・分化の実態を分析して，外的環境，「場」の特性，交通事情，市場との結合関係などの諸条件およびその変化との関連を明らかにし，農業の地域的動態の把握につとめる。対象はこれまで日本農業であったが，今後は日本を含むアジア農業とし，既に西アジアでの現地調査の結果をもとに，新たな考察を試みている。

主要業績

「戦後における静岡県農業の変容」　『静岡大学教養部研究報告』7，1972年3月

「十勝・網走のてんさい栽培」　『日本列島　農産漁村　その現実』涇草書房，1972年3月

「限界地畑作の展開と『過疎』地域化」　『商品生産の転換にともなう「過疎」地域の形成・変動』広文社，1974年3月

「イランにおけるむらと町を結ぶ交通の農村的形態」　『東洋文化研究所紀要』70冊，1976年3月

蜂屋邦夫

主要研究課題

＊六朝時代における三教交渉史の研究

『弘明集』中の諸資料につき，上記課題を検討中。目下は，劉宋の何承天と顔延之の論争を題材に，儒教的・伝統的な精神と，仏教に傾斜する六朝的な精神との葛藤の諸相を，可能な限り詳細に分析し，さらに，この論争を六朝精神史全体の中に位置づけようと試みている。また，儒教の変容・展開の問題の一環として，魏晋時代における儒家と道家の言語観につき，併せ検討する予定である。

主要業績

「僧肇の般若無知論及び劉遺民との問答について（上）」　東京大学教養学部『紀要　比較文化研究』11号，1971年8月

『重陽真人金関玉鎖訣』について」　『東洋文化研究所紀要』58冊，1972年3月

「范縝『神滅論』の思想について」　『東洋文化研究所紀要』61冊，1973年3月

「中国思想における伝統と近代」　哲学シリーズ『東の思想・西の思想』3，三修社，1973年5月

「哲学の成立――中国――」　哲学シリーズ『哲学の復権』1，三修社，1974年2月

「中国における精神革命」　人類文化史『都市と古代文明の成立』2，講談社，1974年12月

「東洋の自然観――中国――」　哲学シリーズ『存在への回帰』4，三修社，1975年2月

森　利一（1972年5月まで）

主要研究課題

助手在任中の業績は別途，掲示した通りであるが，それらはインド政治の現状分析のカテゴリーに属す。私は，インド留学の機会に，印パ分離独立について勉学し，『印パ分離独立の研究』と題して出来上っている（学位請求論文）。しかし，イギリスの王立研究所が研究対象期間の政府レベルの資料を刊行しはじめており，これらの発刊にともなって幾つかの箇所の書き替えが必要なため，上記の研究の公表はさし控えられている。いまその枠組だけを紹介しておくならば，第1部国際政治の動態とその変容，第2部英領インドの政治変動分析，第3部憲法制定権力と憲法制定過程，という形になっている。なお，退官後の研究成果として『インドの開発行政』（共著）アジア経済研究所，1974年3月のあることを記しておく。

主要業績

「インドの選挙分析と政治変動——1967年の州下院選挙を中心にして——」日本国際政治学会編『国際政治』39号，1969年10月

「インド連邦政府首相選出の決定過程——1964年，66年および67年のケース」『東洋文化研究所紀要』52冊，1970年3月

「インド国民会議派におけるリーダーシップ——連邦政府首相と総裁の関係をめぐって——」『アジア経済』11巻3，6，8，9号，1970年3月，6月，8月，9月

「インドの第5回連邦下院選挙」日本政治学会編『年報政治学，1971年度版，1972年3月

加藤祐三（1973年3月まで）

主要研究課題

＊中国革命と農村社会（1910～70年代）

社会的革命と農法変革（技術改革）との関連を中心として，具体的な村落レベルと全国的な政治・経済との両面からつめる。とくに1920年代の農民運

動と延安期の解放区における農法変革を当面の主題とし，これまでの研究とのつながりを持たせる。

＊植民地支配と民族解放

植民地支配を受けることで始まった近代は，植民地支配を行なった近代とは異なり，進歩にたいして後退，富にたいして貧困，栄光にたいして悲惨の近代であった。この近代を克服するものとして民族解放が登場した。当面の研究の重点は植民地支配の諸類型を明らかにし，近代という時代を世界史的視野から位置づけることにおく。

主要業績

「中国初期合作社」　滝川勉・斉藤仁編『アジアの農業協同組合』アジア経済研究所，1973年

青木　保（1973年11月まで）

主要研究課題

＊東南アジアにおける宗教と社会

――とくにタイを中心とする――

テラワーダ仏教社会（ビルマ，カンボジア，（クメール共和国）ラオス，スリランカ）の論理と象徴形式の社会人類学的研究。社会人類学的な実地調査を通して，テラワーダ仏教がこれらの社会でどのように受容され，土着の論理に融合し，文化の総合体としての象徴形式を作り出しているかを研究する。仏教儀礼の調査を分析に焦点を与てる。

＊「土着主義運動」の研究

いわゆる「未開」社会に起った「千年王国論」的宗教運動を分析対象として，「近代」が「未開」社会にあたえた物的精神的影響とその反応を，知的な体系の再創造という面で分析する。と同時に，「土着主義運動」がもつ人間社会に普遍的な表現形式の面を，欧米，日本などの例との比較研究によって，抽出し分析する。メラネシアの「カーゴ・カルト」の分析を主たる課題